

# 川柳塔

昭和四十一年一月一日発行  
昭和四十五年八月二十五日印刷  
昭和四十五年九月一日発行  
（毎月一日発行）  
（第六十号）



No. 60

九月号

# 黒潮躍る 紀州路へ



<白浜ゆき> なんば発時刻  
 急行 きのくに6号…(毎日)…12時51分発  
 急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発  
 急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発  
 <白浜・新宮ゆき> なんば発時刻  
 急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発  
 夜行直通列車…(毎日)…22時15分発  
 ●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社  
 (641) 8686 (341) 5038

**南海電車**

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた  
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186代  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇 る	海 岸 美 を	風 光 明 媚 な
--------	------------------	-----------------------



# 川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

竜飛岬

中島生々庵 (1)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

叱られる

正本水客 (2)

川柳日記

麻生葭乃 (21)

「水鶏笛」吹けば

橋高薫風 (19)

へそ曲り陶人記

東野大八 (22)

近作柳樽

北川春巢選 (30)

秀句鑑賞

(同人吟)

若本多久志 (26)

九輪抄

西尾 栞 (27)

清水白柳選 (42)



## 叱られる

正本水客

空はよく晴れていた。南大阪のある交差点信号が青なのを見て渡りかけたが途中で黄に交って、三分の二ぐらいの所で立往生していった。車の洪水が体の両側を流れてゆく。渡り切った処に丁度交番があつて、若い巡査が立っていた。これは叱られるなど覚悟を決めて近づいてゆくと「気を付けて下さいよ」ときびしい表情で言つてから「危いですからネ」とニコリ笑つて、背を向けてコツコツと靴音を響かせていった。

青信号でスタートして途中で黄になったら黄色の時間は、その道巾を普通に歩いて渡る余裕がなければいけないんじゃないか、そんなことを考えながら若い巡査の笑顔は私にさわやかに思ひ出していた。

◇ 暑いお盆の日であった。京都西大谷に墓詣りをすましたあと、気の向くままに伏見へ出

川柳五十三次 …… (三)

富士野鞍馬 ……

(24)

近詠 ……

諸家 ……

(59)(53)

虫明の宿 ……

西尾棗 ……

(28)

あの日のあの人のこの思い出 ……

(39)

初歩教室 吉田水車・直原七面山・不二田一三夫・西いわを・西野生長

(50)

大萬川柳「レンズ」 ……

清水白柳選 ……

(52)

柳界展望 ……

(薫風) ……

(54)

本社八月句会 ……

(庸佑) ……

(56)

各地柳壇 ……

(文秋) ……

(60)

一路集 〔主 役〕

国弘半休門選 ……

(48)

〔主 役〕

林野魁光選 ……

(48)

編集後記 ……

不二田一三夫選 ……

(49)

座右の句

壁に塗る土にも雑草根をおろし

(白柳)

私の句

人は人 我が道を往くマイペース

西田 柳宏子



た、目的は百大山石峰寺。国鉄奈良線を越えた辺りで、道路の高さより家の入口が低くなっている昔のままの造りの酒屋さんを見付けて、トントンと下りた処に年配の主人らしき人が立っていた。セッポウジへの道をたずねると、道路の処まで出て丁寧に道順を教えてください、ふと厳しい顔付になって「お寺はセ、キ、ホ、ウ、ジ」と一語一語切るように言って、くると店の中へ這入っていったセッポウジなどと発音したことが、ちと面映ゆく私は禅の一唱を喰ったような爽やかな気持で赤壁の竜宮造りの総門下に辿りついた。本堂横の枝折戸から裏山に出る。江戸時代の安永から天明へかけて十年近くを経て完成したという五百羅漢が、裏山を一と巡りするにつれて次々と現われてくる。あるものは磨減し、あるものは苔寂び、その表情に姿態に洒脱な味があふれていて、暫し暑さを忘れさせてくれる。気がつくと辺りは降るような蟬の声であった。

〃 十八羅漢それぞれに蟬聞いている〃

つい此の間、深草の宝塔寺へ行った帰り、稲荷へ出る同じ街道を歩いてみたが、例の酒屋さんの店は見付からなかった。



中島生々庵選

倉敷市 小幡里風

出し切った力で今日を負けてくる  
安全と見て羽根やすむ迷い鳩  
限界と知るカンフルがもう効かず  
蠅一匹寝て待つ果報へ来てとまり  
微力ですがと手の内まだ見せず

青森市 工藤甲吉

浪人の手足もつたいなく遊び  
八時間今日も叱られ睨められ  
閑中の忙へ税務署ちようど来る  
会えた子に慈母観音の顔となる  
わが孫にわが血みつけて苦笑する

京都府 大鶴喜由

別れさすつもり小出しにいぶるなり

好きになる前にご近所聞き合せ

姑は泣く孫を背に押し出され  
ぶらんこに鍵っ子残し黄昏れる  
夫の気ふたあり生んだ頃わかり

五月一日脳卒中で倒る病中句  
諫早市 川岡靈眼子

形見わけみな戻されて来た蘇生  
パフ叩く影を写して見舞客  
生神が脳卒中するかと聞かれたり  
注射した血汐と知らず蚊がたかる  
甦えりこの世の空気のうまさ知る

大阪市 山川阿茶

風鈴を吊る軒先もないくらし  
おはようと云ってた九官売れたらし

鬼瓦せめて雀と対話する

さわがねば何んでも放っておく政治

梅里さん三年祭

口ぐせも真似て思い出話する

大阪市 正本水客

石に托した心を風は秘めている

前に出る鉄則を心に言いきかせ

ゴミ箱のフタにたまって雨あがる

涙が耳にはいる 泣いているんだよ

ひとつぶの真珠になる日待っている

大阪市 福井野迷路

裏表足して二で割る人生さ

憎くむべし蝨絶やした過剰米

踏んまえた地球も宇宙の塵の中

鼻かけた地藏さんから百舌の声

何もかもやっけて終うて夢丸うし

笠岡市 木山要次

七月号の表紙

親も寝る子も寝る猫も午後を伸び

ご想像に委されからむ隙がなし

料亭の奥に汚職の芽が育ち

保護色の急には色が替えられず

共倒れするとも知らず夢が抱き

松江市 吉岡通児

(大阪素描五句)

道具屋筋へ来て疲労度を意識する

大阪の恥部道頓堀濁り

戎橋ネオンに足をうばわれる

おおきにと言った娘の瞳に魅せられる

田舎出と知れまいとして口ごもり

神戸市 仲どんたく

たっしゅさは主治医にお見それされるほど

(白浜にて一句)

にやにやと笑うて拝む歓喜天

長崎は歌のとおりに雨に濡れ

ほんとうはどんな顔やろアイシヤドー

(還暦)

とは云えどまだ煩惱と欲の数

倉敷市 野田素身郎

万博に来てまで宝くじを買い

工事ミス洗い浚いにだした雨

妻の元同僚だった新課長

口ごもるほどの事ではない頼み

歳月があんな美人を羨びさせ

下関市 石川 侃流 洞

洪水へ人智の必死土のう積む

凡人のいたでを埋めるネオン街

工夫長機械をけなす意地を持ち

金のない日曜朝飯ぬいて寝る

他人様の赤字で質屋よく儲け

岡山県 浜田 久米 雄

年金に合わす暮しがまだつづき

もうあかんそうやそうかと仕舞なり

休耕田草ぼうぼうとうんかの巢

乗物がある万博に疲れ切り

開通の電話電話で言うて来る

倉敷市 本田 恵二 朗

ひとり寝の寝息少々酒臭し

童顔で涙もろうて仲人好き

先頭を行くロボットの無表情

一代の倅せ敷かれっぱなしです

過疎の村やたら蛙が鳴き交し

豊中市 戸田 古方

うちの子も親のとり合いしてくれる

「まけてたまるか」喜劇の題でした

尺取虫がわろているともしらず

背を洗すだけで上った家族風呂

平凡な今日も一期に一会の日

東大阪市 久米 奈良子

刻あやすゆとりへ病苦やわらいで

絃の悲しみ風が来てかきならす

雲走る恋の逃げゆくさまに似て

糸つむぐ愛のみやびを織るゆえに

病苦負うさだめにしても晴れもあり

米子市 八木 千代

添うて来て歩中も揃う一万歩

万博にて

万博はおいしかったと荷をほどき

横取りをされた話題で蒸し返し

どたん場の子へウナ電で「マカセトケ」

幸運の余韻しみじみ受話器置く

高槻市 傍 島 静 馬

こどもらに余生頼っていた甘さ

有るものが有って長生きいたわられ

母親のレジャー娘に会いに行き

遺言をしてから病氣持ち直し

優曇華を気に病む老母を笑えない

大阪市 本多 柳 志

スモッグ警報会社は生きる煙を立て  
山紫水明だけではくらし成り立たず

夏まつり団地は文句多いとこ

三千円の重さメロンで試めされる

露天風呂女へむごい陽が当り

倉敷市 水粉 千翁

運命を云わず野に咲く花をほめ

汗だけにわかる涼しさ通り抜け

釣り上げて見せるつもりへ陽が落ちる

見破っているのか笑顔やわらかい

値上りになってきちんと並べられ

岡山県 直原 七面山

農継ぐにさえ要る覚悟

列を作って待ってるタコ焼

一色加えて虹となる夢

言わせておくと女馬鹿にされ

疑う程に良い話

大阪市 金井 文秋

他人には見せない顔を孫に見せ

福銭のなる程こいつだけ残り

儲かったようにママには乳が出る

公害が諸行無常に輪をかける

一ト枝を貰ってほしい鉄入れ

熊本県 有働 芳仙

いろいろな生き方があるスラムの灯

納得をさせるに一枚色をつけ

特売の列へ小さな財布抱き

くじ運のいい子へママの夢があり

のし袋みんなの腹を探り合い

堺市 吉田 圭井堂

胃カメラも飲んで六十よう越さず

やきもちに時効ないのがなやみなり

灰皿にお客個性を残しとき

叱られて二食も抜いた兎に慌て

白骨で帰えれば通夜になる団地

大阪市 大坂 形水

冷房がないからやめるお手伝い

ゴルフ場へ住宅街が伸びてくる

勝てばよいだけのゴルフが多くなり

生活のかかったプロの仕ぐさ真似

ゴルフでも金田は見せるゴルフする

京都市 都倉 求芽

かき氷話切り出すように溶け

梅雨明けを茄子あざやかな色で告げ

障子窓梅雨を追い出す茶の香り  
筆不精みこして電話かけてくる  
プラカードへ冷房のあまり風そつと

竹原市 小島蘭幸

笑い声ひとつの屋根の下に住む  
熱演へ遅れた拍手のワントテンポ  
なるようになるさともう一人の俺  
ぼんぼんのファイトがだんだん恐くなり  
手紙またすれ違いおかしく淋しい

大阪市 橘高薫風

竜飛岬

句碑激し浪ここに果て風ここよりす  
竜飛岬地に這う蟻も疾風の囀

平泉金色堂

光堂大阪地獄から来しに  
消えることなき金色の蜃気楼  
光堂胸三寸に収まれり

尾崎市 長谷川三司

(近況)

大雨の予報へ朝の腰痛む  
老化とは淋しき言葉レントゲン  
ホルモンの注射でもたす人生か

つゆ晴れの影細ながく前へかがみ

姫路市 隠岐不酔

大学を出て給仕から社会学

停退の挨拶未練ある口調

気にかかり九十引いたり加えたり

無礼講と言うに社長床柱

兵庫県 遠山可住

バランスの中の人間と気づかずや

伸びる子の横で小そうなって寝る

重役夫人へ家内が先になり

金出来てみてしあわせへ腕を組み

下関市 国弘半休門

中道を歩む男の右顧左見

マイホーム新車は夜露にぬれてあり

幸はこれからこれから喜寿米寿

晴天を悦びあうも旅のこと

芦屋市 丸川初甫

地下街を泳ぐ早さで通り抜け

美容師のお世辞本気で聞いていず

親切な電話に秘密皆喋り

新歌舞伎座市川海老蔵襲名披露

にらんで見せる仙台平の折り目

門真市 福島鉄児

名乗り出ぬ親あり迷い子どうする気

嘔りに似ておぼはんの暇な午後

プライドがありおっさんを聞き流し

待たされることにも馴れて根のよさ

大阪市 木村水洞

台風も天の摂理と悟るとき

長梅雨にふえる稼ぎを羨まれ

医は仁術を長屋疑わず

台風へ朝から長屋酒になり

倉吉市 奥谷弘朗

伊勢に旅して(一句)

伊勢参りかたじけなさがまだ残り

なるほど交っているなと初対面

ほろ酔が頭もたげた好奇心

脈あると見たかセールスしげく来る

富田林市 岩田美代

真すぐにものを信じた日の不覚

整わぬ心を使う団扇持つ

忍従のこぶし固くて開かない

虫の音を蹴って思案の夜を歩く

奈良県 草深醉升

職案でのらりくらりの手も覚え

お人好しなどと善意を踏みにじり

増築完了

やれやれと柱を撫でて坐って見

宝山寺に詣で

念仏を唱える横で手をたたき

島根県 藤井明朗

交通事故しきりわが家に来てあわて

冗談にまぎらしても本心ついて来ず

老妻の言う事を素直に聞くも歳

わが身大事に仕事遅々となりぬ

伊丹市 小川静観堂

少年の日の思い出

水飯を嫁に聞いたが知らぬらし

亡妻を偲ぶ

梅雨明けの天と地にわかれ住む二人

蝸壺のはかなき夢を俺もまた

物を言う目と口に鼻は板ばさみ

下関市 桜川不水

御し難しそつとしておこ更年期

投函をして口笛は丘へ向け

人間はこう笑ってる猿の面

組し易しおんな言いたい事をいう

奈良市

宮口 笛生

夕立が木々に緑を塗りかえる

母入院

葬式の心づもりもした入院

病院の一日長い雨の窓

母居ない空間埋めるものがなし

大阪市

有信 新之助

よくもまあ雨があるなど今日も暮れ

感受性ゆたかな人でもてあまし

信号を待つ歩道橋の涼しそう

発疹といわれて病気らしくなり

姫路市

村上 春巳

俺んちは白黒だけどまだ映り

叱るだけ叱かり財布を覗いてみ

国道を横ぎる蟹のあわてよう

話すことなくなり鹿が来てくれる

八尾市

高杉 鬼遊

一度しか生きられぬ世に無為無策

男なら黙って飲めとビール売る

ゴルフ場の芝生は高い汗を吸い

明暗のこころを継ぐ手を洗う

(堀江正明氏を迎え)

大阪市

宮尾 あいき

往復出来る程もバスを待ち

しっかりし云うてる方もたよりのない

気楽げな夫の寝顔にふと淋し

台風の外れた朝を遅刻する

米子市

林 瑞枝

思い立つことあり雨の露路を抜け

更年期気にせず若い輪にまじり

不肖の子俄か孝行するも歳

キスマーク秘す膏薬を見舞われる

愛媛県

渡辺 曉童

大根の値が講演のネタになり

父の日の孝行となる一級酒

CMのうまさ感心して買わず

退職をするとねだりに来ない孫

大阪市

天正 千梢

湯殿山神の温泉に足ぬらし

みちのくは出羽三山の守護の中

雨もよし三度詣でる永平寺

歯一本抜くにも神にすがるなり

奈良県

石倉 旅風

面白い略字を書いた看板屋

予定表きちきち消してよく眠り  
もやもやを趣味の一点張りに生き  
粋をつけた酒なら不味かろに

路郎忌

大阪市 中川 滋 雀

一とすじの道あかあかと雲の峰

鶴橋附近

昨日ミニ今日はチョコゴリで祝い事  
にんにくの匂いで親しく話して来

地下鉄駅

何もかも汚染が続く曲りかど

笠岡市 出原 真 奇

妻の両親と巡礼の旅

何の部屋も床に大師がお座します  
時代です魚も食わず遍路宿

診て貰う前からガンにきめており  
夜ふかしの土産は咳をもち帰り

鳥取県 森 田 布 堂

濁りなき空と水あり故郷の過疎  
週刊誌やめて育児の本を買ひ  
スタイルを靴の踵に助けられ  
赴任した土地で嫁とり家も建て

鳥取県 清水 一 保

愛情にうえて雑草ぐれ始め  
戦争と平和が共にする自転  
封切らぬ先よりわかる子の便り  
減反をしても精農二倍穫り

大阪市 神谷 凡 九 郎

生きる術刹那刹那の転身か

すれ違う女でよし振り返えさせる程の美

さらわれるようなCMそれがネライなんだって

表面の悲しさ裏に闇と云うヴェール

倉敷市 竹 内 翁 童

月給のうちと叱かられに歩を運び

犬猿の仲で続いている友情

実状を知らぬから文句いえ

腹芸に見えずパントマイムで終り

今治市 越 智 一 水

川風が浴衣橋まで歩るかせる

夜市には父アクセサリーでつれ出され

貧農を小馬鹿にしたよう草ははえ

宣伝をよそに老農鳥をうち

竹原市 森 井 菁 居

もし俺が蚊ならやっぱり血を慕い

失意をば知るよしも無く川面澄む  
国富んで山河の詩が蝕まれ  
手ばかりが師匠の目にはあからさま

呉市 林野甦光

恋捨てて女思い出だけ残す  
人間をこんな所で見た飯場  
老らくのこれから進む風当り  
長靴が垣根にずらり陽をもらい

和歌山市 垂井葵水

言い訳を額の汗に見破られ  
たくらみに乗るカクテルの甘い嘘  
施主知らぬ間にバケツ減っており  
無料とは書いてなかったよしず張り

鳥取県 川崎秋女

ゆかた着て妻も五十の紅を引く  
背かれてからの酒とは友言わず  
三日三晩啼いてこの家の猫になり

八十八才伯母病床に

九十まで生きる執念の灯をともす

島根県 堀江正朗

飛行機で去ぬと珍客かき廻し  
親切な目目目があり旅うれし

悴せは雀よりさき妻の声  
見えぬから負けず嫌いが負けている

倉敷市 小野克枝

誕生日ひとりレモンの甘酢いく  
流れには素直に浮いて行くおんな  
何気なく聞いた噂にうるたえる  
地味な方買って帰っておこられる

大阪市 島野大吉

遺稿

思いきや六十路に青春（はる）の甦る  
傾いた軒端に菖蒲男子あり  
恥ろう乳横目に流す聴心器

岡山市 川端柳子

意地でなく孤独でもなくひとりの詩  
裏街道走って走ってから悟り  
包装が下手な位はがまんする

京都市 松川杜的

スイスイと卒業したがコネで負け  
平凡がいいなと思うも二三日  
碁仇にされてあと取りつつがなし

東大阪市 竹中綾女

紫陽花の花びら落とす雨つづく

台風に七夕の笹たたかれる  
女上位子供産む事変り無く

堺市 藤井 一二三

集団就職上野に着いた里心

メイドインジャパンの文字を見る質屋

七夕

児に託す願いに笹の葉がしなり

札幌市 平野 青夜

流灯会女の業のかなしさよ

コンパクト閉じて覚悟の顔になり

水だけでねばるに慣れた待ちぼうけ

島根県 小砂 白汀

構えれば蠅もキリリと身構える

明眸皓齒バリバリ豆を噛みくだき

打たれても紫陽花やっぱり雨がすき

桜井市 岩本 雀踊子

くたびれた妻の乳房へつぐビール

手のぬくみ心にふれる日の日記

六人が稼ぐ明日の米を磨ぐ

岡山市 大森 娛句 楽

蓑笠で土砂降り避ける軒を借り

老衰の蛇口締めても余滴垂れ

天の川汎濫したか降り続き

吹田市 岡田 徳次郎

侠気とは別親分は犬ぎらい

七夕へ露路奥みんな仲がよく

飯場の月へまじる松虫

高槻市 福田 丁路

大馬鹿の筈が抜目のない暮し

雨漏りの悩みも深きマイホーム

かまきりの闘志人間寄せつけず

倉敷市 藤井 春日

去る者は追わずで済まぬ人不足

見守った末を一肌ぬいでやり

虚栄心満たす目当の共稼ぎ

藤井寺市 西 いわを

増え過ぎて平和の鳩は嫌らわれる

へそくりの出来ない妻で委される

慰謝料をとるも取らぬも人次第

岡山市 横山 一声

百姓の汗を知らずに机上論

空気が悪いがお金のとれるとこ

盆栽をこうして鉢ばっかりたまり

竹原市 山内 静水

有言実行迷惑がられ恐れられ

百円の寄附へ那智山からハガキ

旅なれて妻がカメラにとるポーズ

大阪市 児島与呂志

末っ娘をつい可愛いがっているらしく

長女から一〇分間隔に起き

俺を気の毒がってくれる妻

松江市 小林孤呂二

盃をためて酔うたと宣わり

それぞれに個性あり夏の花に虫

大阪散策

金の威をまのあたりに見て御堂筋

岡山市 田村藤波

八月十五日陛下の低音忘れまい

早乙女の田植絵になる雨が降り

土橋から螢を呼んだ友の亡し

岡山市 池田古心

拒否すれば逃げよう恋に眼をつむり

仔猫さえ競合い膝に来て眠り

万博見物

万博に来てまで不味いそばを喰い

愛知県 大谷月都

作業服でも接待馴れをして居ます

伝票を取られて主客が転倒し

五分程駅前食堂進ませて

石川県 馬場魚山

六十に近く野心のない希望

草野球百姓へ済まぬホームラン

虫が来て困る暑さに窓を締め

松江市 岡崎祥月

立寄らば大樹の隅に俺は生き

風うなる夜空星なし月もなし

万博で出雲訛りをふと拾い

松江市 中川晃男

傷跡を見せる補修のセロテープ

ぬけがらの格式構える鬼瓦

誰も来ぬから墓はとんびとたわむれる

広島県 高橋鬼焼

さてどこへぬけよう風が思案する

働けぬ窓へ働く人の声

それぞれに行く道があり靴が鳴る

鳥取県 谷無閑

古稀にして漸く過去と云う感じ

迷信と伝説の家に住む不幸

転任に菊の根分けを記念とし

美禰市 安平次弘道

篤農の意欲そぐよに地価がはね

伝統を守るシゴキが批判され

モーニング百姓するより肩がこり

大阪市 室谷徹舟

すててこをたしなめる娘に素直なり

マニキュア今日は鬼畜の爪に見え

出無精の妻をクーラーがしぼりつけ

八尾市 香川酔々

老友に似すぎて笑えない羅漢

遠慮なくビールは吸い込む日照権

地下街へもう一度入る俄雨

大阪市 今西章雅

言うことはもうそれだけかと念おされ

これしきの事をと老いの瘦せ我慢

ふと生に疑問持っても死ぬもせず

高槻市 山田季賛

真夜中に飲む水の味を賞め

義足ぼつりぼつり昔の軍隊語る酔い

ここにもこぼれておったい話

大阪市 河井庸佑

生活のリズムくずした夏休み

無理をして取った休暇を疲れに出

クーラーをつけ扇風機のおきどころ

守口市 羽原静歩

七人の敵を逃れて冷奴

古傷のオブジエひっそり顔を出し

雑草のいのちそれでも天を指し

岡山県 出原敬一

貸す金を持ってて醤油借りにくる

前向きに善処やっぱり空手形

逆境の妻に一人で荷を負わせ

和歌山県 野村太茂津

喜怒哀楽ビールはちゃんと胃に入る

死を賭けた動悸やっぱり生きる音

蟹の目よなんでそんなに見つめるの

久留米市 永松道雄

幸せを背負いはるばる里帰り

サボテンの刺が咬みつくミニの肌

ゆっくりも出来ぬ慰安のスケジュール

大阪市 川口弘生

玉造川柳会和歌山巡拝

トンネルを抜けたら紀州の雨明い

神杉の偉大千年目の雷に耐え  
反り橋をカーもよいしょと乗り越える

平田市 久家・代仕男

浦町は寺院の庭も網を干し

台風がUターンした青空よ

誤字あて字まかり通った盲判

小松市 四方天弘美

新築の仏間仏壇朽ちたまま

台所風呂場と新築見せたがり

ポリダライ金魚不服のない泳ぎ

兵庫県 大江秋月

駅長の気質が分る朝の駅

金魚さえ沈みがちな今日の空

幸福な植木よ芝生に囲まれて

笠岡市 松本忠三

仏壇の埃りの中で居士大姉

制服にびったり似合う挙手の礼

殊更に上か並かと聞きかえし

東大阪市 竹中肖二

暑いのに若い男女の寄り添うて

万博で東南亜細亜にこんな国

温泉の宿の膳を老妻値ぶみする

大阪市 西川誓二

あと取りに金の成る木の嫁探し

うかつにも見合だったか今日の女

娘の就職内定

娘に過ぎた会社が慈悲で採ってくれ

大阪市 本庄金三

編棒の手を止めテスト見て貰い

忠臣へ歴史の見方交って来

聞く方が気になる司会の上手下手

岸和田市 葛城伊三郎

それからを聞きたい顔へ云わんととき

宿借りた幹を腐らすつたの色

煎り豆を一粒宛の意地で噛み

堺市 高橋千万子

人生の坂道今日も又すべる

うたごうて泣くはやっぱり愛してる

売る時の値段をいれて車よる

愛媛県 村上旭童

皆よけてくれるつもりダンブパー

どれも皆妻が起せばおきてくる

まっすぐに帰れと運賃だけ渡し

岡山県 荻野鮫虎狼

こんなにも空気がきれいな路みち  
見せるだけ見せて女の夏姿  
躰糸かかった俣で形見分け

和歌山県 西尾 公作

割勘で有志氣勢の上らぬ日  
郷愁の指紋を残す汽車の窓  
コップ酒遠き貧苦が浮き上る

竹原市 時 広 一 路

息切れをしたのが待ってくれていた  
腕で汗ぬぐって祭太鼓鳴る  
鯉の背ちらりと見せて水澱む

下関市 志 賀 木 石

返済の日へ光陰は矢の如し  
大盃も槍も扇で黒田節  
息せき切って生きる毎日

和歌山県 増 田 次 章

待つことに馴れた群衆待ちつづけ  
手製には縁遠くなるママの味  
有料ときいてにわかには態度変え

兵庫県 河 原 みのる

死ぬ覚悟出来てる筈のさりながら  
えさ呉れへん奴ちゃ一バツしてごろり

松江市 柳 楽 鶴 丸  
コンピューター好みの甲斐性のない男  
結婚してコンマ以下にピリオド  
八尾市 古 川 鶴 声

万博の跡地めぐって(二句)

半歳の命万博揺れ始め  
盃蘭盆に逢うと幼な友は逝き

広島県 岩 谷 二 三 枝

雨脚に今日のうつろを覗かれる  
野に咲けば野の色に添うこぼれ花

大阪市 宮 地 双 楽

物心の調和暮しに反映す  
欠亡に耐える心を見失い

和歌山県 土 谷 城 石

袋物祖母の形見はみな手編  
煙草まで手巻になって戦さ負け

尼崎市 高 津 徹 也

戦争を知らず軍歌を録音す  
ほんとうの平和かどうかトップ記事

堺市 伏 見 茂 美

根分けして隣りで咲いた憎らしさ  
子沢山新世界まで食べにゆき

自 選

高槻市 若柳潮花

蛙鳴く道を団地の灯へ帰り

ささやかな寄附追善の名で届け

糸にのる舞台の恋は添えぬ恋

ごひいきもついの浴衣で来る楽屋

名古屋市 吉田水車

否応なくみやげ売り場に出る仕組

立ち読みの奥の方から咳払い

信号のない世の中は楽しかる

大陸川柳人第六回同窓会於伊勢

神域に雨もよし友さらによし

大阪市 不二出一三夫

イエスさま日蓮さまほど肥えていず

風を追え風をつかみに行け子らよ

寄席(二句)

勝負どこここだと客を離さない

爆笑のあとをこわごわ出る舞台

★

菊沢小松園

強いもの勝ちで地球儀揺れやまず

同じよう播いても大小乱れ咲き

乳が出るだけではないと子も氣付き

黒揚羽翅べば忍者と言う姿

北川春巢

エリートと思いついている頑固

氣象台の雨後晴を当てにせず

忍び手を知っていたことほめられる

永住と決めた土地の蚊憎う打ち

ニュータウン竿竹スピーカーで売り

若木多久志

近代化すすめて社長歌も詠み

長生きの相と言われりやそう思い

赤飯を訊けば自分の誕生日

橋筋に孤城を守るせんざい屋

老妻が謝まるまでの軽い意地

西尾 栞

老妻の日傘の派手をとがめまじ

ぬすみたる唇熱きこと熱きこと

浴衣着て初恋というものありしかな

仲人は猥談も失敗談も一ついれ

処女句集とはおこがましきや六十一

栞氏へ祝吟

孫相手にするには余燼なお熄まず



著者 西尾栗氏

## 温泉や座り羅漢に寝る羅漢

この句に出会った時、嘗って路郎先生が、西尾栗を川柳雑誌の後継者にしようと言われたというのがうなずけるのであった。申し分のないのは句だけでなく、腹乃先生と生々庵主幹が序文で筆をそろえて述べておられるように、健康で明朗、頭脳明哲、人一倍の情熱漢である人柄、そして、阪大川柳の発足当時からのメンパーであるという柳歴、云わば柳界のエリートコースをひた走り、年若くして中島生々庵の後を継いで不朽洞会の理事長となり、句集「私達」の刊行に力を尽くされ、路郎先生の古橋祝賀大会の記念事業を果たされた。

何もかもが申し分がないのであるから、この度、出版された句集「水鷄笛」も良からぬ筈はなく、生々庵主幹は、「この句集が世に所謂足跡回顧的な集録とは絶対に趣きを異にするものであって後進の指導に裨益するとい

## 「水鷄笛」吹けば

うだけの面から言っても、世紀の名句集であると同時に路郎先生の「旅人」につぐものであると申ししても決して過言ではないと確信するものである。」と言葉を極めて賞讃しておられる。

奥付に昭和四十五年七月七日発行、(第五回路郎忌)とあり、巻頭には、「謹んで路郎先生に捧ぐ」の文字がある。そして巻を追って「恩師」「悼友」の項があり、「父・母」の項へ続くのである。こういう句集の構成を見れば、著書が、人間関係の、殊に恩義恩愛の情に厚く、誠実を尊ぶ人柄であることが思われるのである。「噫々吞友文蝶君」は故人と肌を接する趣きのある優れた文なので全文紹介する。

### 噫々吞友文蝶君

文蝶君と僕との行動は、弥次さん、喜多さんの仲だったから、残った栗は誠にせつなく、淋しい。句会のあとは十二時迄三時間あった。常任理事会のあとは二時間あった。殆

んど必ずずと云ってよい、この二時間、三時間を有効適切に呑み廻った。むしろ二人は、柳友というより吞友であったかもしれない。ちびりちびりやりながらの彼一流のしゃべくりが、又愉快だった。

### 口ふりは今にも落ちる仲居さん

よくこの句を吐いて、例の受け口の頤をつき出して、独り合点にうなずいていた。この句をきいて、黙ってニタニタしている俺ではない。Hな話になると人後に落ちない。酒のまわりはよし、話は面白い。「ホイ来た」と、もう一軒ということになるのも是非もなかった。スタンド「大町」を出ると、パー「姉妹」が待っていた。てっちり「すし半」をすむと、料亭「松本」であった。彼はここというて、きめた呑み屋はなかった。パーへは行つたが、キャバレーや、アルサロへは行かなかつた。若いホステスより仲居さんむきだった。

彼は又何でもよく知っていた。出てくる料

橘 高 薫 風

理の一品、一品についても、何だかんだと説明をして、例のしゃべくりの種にした。又文蝶の「それわね」という言葉は有名だった。

常任理事会で問題が出ると、「それわね」という前置詞でもって一言を吐いて、ホホーと感心したものだ。所謂物識りだった。遠慮気兼ねない男で、ツケツケと誰にでも言いたいことをよく言った。路郎先生にも、前理事長の生々庵氏にでもヒヤヒヤするようなくことを平気で言った。銜気もなければ、蔑視もなく、コンプレックスもしなければ蔑視もない。実に開けっ放しに怒り良い男だった。だから彼の毒舌にも誰も怒らなかつた。寧ろ親愛感すらもって所謂憎めない男というのが定評だった。

先般政界の名物男、大野伴睦老が死んで、紳士面許りの政界になつたと新聞は書いていた。今柳界の名物男、文蝶君なきあとと、あたらずさわらずの柳界が誠に淋しいことである。

### 宵宮の太鼓が鐘と合う哀れ

因みに文蝶君の葬儀の日は天神祭の宵宮の七月二十四日であつた。

合掌

### ▽河内の灯

習いたての手品は妻にしてみせる  
おつうじのあつた話題も老夫婦  
迎え傘の妻に教える水溜り  
しみじみとした夫婦の味の中に、あほらし  
いほど甘い句がまじっている。

### ▽家族風呂

トマトからして嫁と気が合わず  
皿割った音を奥さん寝間で聞き  
意見する體がまだまだ遊びたし  
卷ずしの中だけ食べる祖母育ち  
この項は二十八句の家庭川柳である。

### ▽ギヴァンドテイク

セールスは譬え話をたんともち  
ひがんできけば機械の音も借金借金  
商売の句。商売人の著者は「ギヴァンドテイク」という言葉が好きであるらしい。

### ▽或る日

飛び乗りの今度は切符さがし出し  
経節水晶の型にかかれたり  
踏切まできて鶏引き返し  
仮縫いのお世辞前から後から  
挨拶のものをもらつた声となり  
家出の娘に叱らん説と叱る説  
水煙あげて神輿は洗うもの  
皇太子さんでもとトントン拍子なり  
スタミナがどうのこうのと普茶料理  
琥珀色の湯呑の主は生字引  
天ぶら屋この腕という長い箸  
スラスラと特許番号香具師は言い  
お通夜にごめんごめんと箆笥あけ  
こう並べて見て著者の想の広さ、句のつば  
を捉える巧妙さに嘆じ入つた。こんなことま  
でがと思えるものも立派な句に仕立ててある

### ▽旅 枕

人恋し人煩わし波の音  
日本ライン盃洗にして酌み交わし

### —著者から—

ご購入たまわりました方々に、いちいちお礼  
状を差し上げておりませんが、誌上を借りて  
厚く御礼申しあげます。  
西尾 栞

山菜をつけた流れのかくれ里

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

電灯の暗さ温泉効きそうな

### ▽晩 酌

二次会で土産の鹿の角がとれ  
晩酌の一杯だけは妻が酌ぎ

### ▽紅灯の夕べ

腹違い舞妓になつているといふ  
ワテが通りまっせといふ歩きぶり  
鐘台へ西陽のきつい屋形にて  
若旦那女将が出ると他愛なし  
三味ひける姑で孫をよせつけず  
川柳家としての目は、この世界にもこのよ  
うに深い観察を行き届かせている。

### ▽四 季

元日や素直に鼻をふかすなり  
日曜のちよつと大きいおらが春  
義理のたいうに元日起こされる  
応接間の金魚逆立ちしてくれる  
鯉織りの尻尾が天気変えるなり  
白砂青松夏だけ停まる駅という  
陽が落ちてから来た水着よく泳ぎ  
あほくさとも言わず炬燵を猫は出る  
路郎忌や美濃の大八備後の虫鉈

### ▽横町の雑音

靴磨き磨きたい靴前を行く

万引の哀れ子供のもの許り  
有難い弔辞額にも入れられず  
告別式おかれて哀れモーニング  
▽男ころ  
藤椅子に猿又の紐ゆるう居る  
借りに来た友とは妻にきかすまじ  
給辞職男をたてたつもりなり  
▽女ころ  
ハンドバッグ迷える心パチつかせ

ヨヨと泣いておいて他人さんへ嫁ぎ  
美容院から帰りあわてまいことか  
ネックレス修験者程に巻きつける  
剃刀沙汰の女が通る春の雨  
フェミニストの著者は男ごころよりも女心  
の描写に数等すぐれたものを持たれるのであ  
る。  
▽恋  
恋人が中風筋とは面白し

川柳日記

麻生 葭 乃

虚栄のシンボル孔雀の羽根のある机  
皇統連綿として続くうちの猫  
梅も見ず梅咲く里のそばにいて  
見おさめとなるは今日かと街あるく  
人と車日本は狭し日本は狭し  
陸橋いやなら地下へもぐりな  
タイムテーブル余生の無駄を省く日々  
梅志氏を偲ぶ  
峠越す後姿の淋しけれ  
緑雨氏へ  
死のかどでの整理ゆきとどき



暇と金 金と暇とが食い違い  
愛の果は隣の音もよくきこえ  
▽カステラと花束  
退院へ爪先ゆるい足袋をはき  
お見舞に行けば一杯やっており  
▽北の護り  
空襲へ刺繍の靴は抱かれたり  
▽最後の味方  
手術二日女は化粧するという  
最後の最後の味方は妻なりき  
流し目も上目も出来ず妻は老け  
植木市妻は咲いてる方を買ひ  
著者自身の云う愛妻を詠んだ十七句。  
▽一男三女  
感謝したりうるさがったり子沢山  
四人目を抱いて器用に飯をつぎ  
ようきいとときやと妹ついでに叱られる  
つぎつぎに寝顔のぞいて俺の子だ  
▽水鶏庵  
虞や虞や汝を如何せん四十八  
還暦が自分であった面白さ  
自画像としての二十句である。  
このように略四十年間の作句の中から五百  
句を厳選して蕭洒な装禎の句集にまとめ「水  
鶏笛」と題された。題の由来は、著者が一白  
水星の酉年の生れである故、水鶏庵菜と号し  
ておられるところからとったものである。活  
字も美しい。一人でも多くの柳人が座右にさ  
れんことを願うものである。最後に橋本多佳  
子さんの句を添えて祝意を表します。  
水鶏笛吹けば くひなの想ひ切



豊蔵の茶わん？あんな茶わんなぞ二級酒一本くれりゃあ、一晚で十や二十は作ったるわ」というのが瀬戸赤津の卯助さん。

この人、五年ほど前、東京で「ニセ古瀬戸展」というのを開いた。どこのデパートでもニセだけ余計だ、それをとるなら会場はいくらでも貸す、という。アホらしい、ニセがあるからやるんだ、とうろろした挙句、西部百貨店に落ちついた。

「あそこの堤という社長は若いのがエラかったな、ニセでよろしい、喜んで引きうけた、と二つ返事だ。左様、三日間で二百万円ぐらい売れたかな。有吉佐和子という小説家が買ってくれたな。あのコは、今だにわしのもんしか家においとらんそうだ。なに、売った金？キレイに手伝人四、五人と飲んでしょうで、家に帰ったら文無し。展覧会の余徳というたら宿酔をどうしたら癒せるか、そのコツを覚えてたぐらいのもんよ」

そういつてワッハハと笑った。この人の玄関には、フスマ一枚ほどの写真が幾枚か派手にぶら下っている。おかしなハダカの女や、ラチもない男どもの顔。一体何者だときくとハナトコバコちゆう喜劇作者とそその一行がきたときの写真よ、別にどうというこたはないが、家のポロ隠しにちようどええから、ぶら下げると、とは卯助さんの説明。

信案の高橋楽齋さんは、無形文化財指定に

なり、その証書を持ってきたその筋の人に「こんな余計なものをなぜ持ってきた」とおしぼりにして庭先へほうり出した。

キリがないので、陶芸作家のキリの方も端折るが、今どきの陶芸家の若いもんときたらものマネ、人まねでどうしたら豊蔵、庄司、陶陽、唐九郎クラスになれるか、その名を得るためにキューキューとして、足が地につくどころか、蚊帳の曳き手みたいに宙に消えさせている。そんな連中が、いろいろとPRして貰いたさに、あれこれと私へ作品をくれたがるか、私は片っ端から右から左へくれてしまふ。

多治見市の見本市でいろいろな千円分を引出物に貰ったが重くて仕様がなかったので、荒川豊蔵夫人にプレゼントしたら、奥からキリの箱一つ持ってきて、これ主人のでき損いですがお礼のシルシです、という。私はお見かけ通り丹下左膳ですので、モノを持って歩くのが大キライ、だから奥さん上げたので、これを頂いたら同じことだからいりません、といってしまった。正直いつて今思えば、シマッタという気は若干ある。

唐九郎さんとこで、金門島のシナ酒というのを飲んでエロ話をやっていたら、奥さんが中休みにお手前を持ってきた。みると織部のひらねりのいい茶わんである。しげしげとみていたら、

「若いときのカマ落ちのしろものさ、いなら持っていけよ、汚い奴だが……」

「いやみてるだけです。陶芸を筆で携るものが、こんなもののコレクションをやったとあつては筆はもてませんよ」

と私がいったら、しげしげと私の顔を眺めて唐九郎さんの話。

「数手前、フランスで日本陶芸展をやったとき、おれの織部の角ざら六枚組を求められ、ピカソのツボと交換した。おれは他人のものでも自分のものでも所蔵欲というものをもたんのがタテマエなので、瀬戸市の古陶陳列館へ寄付した。ところが瀬戸のカマ屋連中が、ピカソかでべそ知らんが、こんな絵付けをするなんてドシロウトもいところだ。とさんざんにコキ下ろすので、貰った市の方もしよげ返つて、こんなことなら頂かない方がよかつた、というので、そんなに迷惑なら返して貰つてもいいよ、といつてる最中に、東京のさる陶商が、ピカソの陶器なら四百万円は下らん。いらなければ今でもキャツシユで買おうといつたので、市の方もアワを食つて蔵い込んでしまった。カマ屋もカマ屋なら、お役人もお役人だよ」ともあれ、陶芸とてへそ曲りの味がわからんようでは、志野とか織部とかと知ったかぶりをせぬことである。

# 川柳五十三次 (三)

## 富士野鞍馬

旅人ばかりでなく、常客として、僧侶と武士があった。にんべんの有無は、侍と寺ということになり、着ても差してもは、僧侶が医者に化粧することである。

品川のおそは古川やくし也 (二四六)

餅花の下向東海道を来る (八三)

また目黒不動とか古川薬師参詣を口実にして遊ぶ輩も多く

品川はいびつな月も見るところ (七三)

品川の月にはくらい道を行 (二〇七)

品川でこんやのむすこどらをうち (二二六)

七月二十六日の二十六夜待は品川の大紋日であり、紺屋の信仰する愛染明王の縁日でもあった。

たびおくりはしより川が人がふへ (門柳(二一五))

見送りも板橋より品川の方が多く、またたびむかひこうして居るはそんだわな (二四三)

と、迎いの人も遊んだようである。

### 1 品川

品川は、日本橋から二里(七・九キロ)、東海道五十三次第一の宿駅で、江戸の出入口の四宿(品川、新宿、板橋、千住)の中で、一番賑わった宿である。

享保三年(一七一八)に、一軒二人の飯盛女が許可され、宝暦十四年(一七六四)には五百人も遊女がいたという。従って、品川を詠んだ古川柳といえは、ほとんど宿場の遊びに関する句である。

五十三次を一ト宿むすこする (安七信三)

品川へ来てながながの口直し (三三七拾二)

品川に居るにかけせん三日すへ (九二七)

品川の衣桁も引などもかけ

品川で同行五人などと洒落 (五二拾八) (拾八)

日本橋を立ち、しよっぱなから遊んだ人もあったようで、また帰りにも口直しというのもあり、のんきなものであった。

入船を見たと初会のやつにいひ (拾八)

品川は波打際へ床をとり (拾八)

品川も旅で泊れば浪の音 雨譚(宮二六)

海に面して、風景もまたよい所である。

海道一の遊君は十奴 雨譚(宮初五)

「品川女郎衆は十奴」と唄にもなっている。

品川の客横づけがきつみそ (六三)

吉原は駕で乗入れはできないが、品川ではそれができた。

品川は鳥よりつらい馬の声 (四七)

未明から馬の往復騒がしい宿場である。

品川は着てもさしても行ところ (九三)

品川の客にんべんのあるとなし (七三)

### い御暑残

島川柳会

市川鱗魚

井川清楽

高瀬恵子

品川の藤沢どまりあまり也 (二四八)

江の島の十里こなたに三日居る (八四〇)

江の島弁天へ行つたことにして流連の不埒者もあつたようである。

戸塚立ちとは見えますときうはいひ (七三)

水の無い川とめ江戸の出口なり (一九二)

江戸を目の前にして品川泊りの人もあり、旅かへり品川からはいんぎんこ (八五)

そうして、品川からは、いと真面目な顔をして江戸へ入つたのである。いんぎんこは慇懃講である。

鮫洲から道にのまれる女旅 佃 (九九三)

女旅鮫洲で道にもうのまれ

加丈(二〇二〇)

女の足弱では、品川からもう道にのまれたであろう。広重の絵に、鮫洲朝の景が描かれ、豊国のハツ山下、御殿山の絵も見られる。

御殿山は桜の名所で、御てん山むなしく帰へる所でなし (三三九)

サアどうだ行か帰るか御殿山 一朝(七三九)

あわもりで酒もりをする御殿山 (四三六)

などと詠まれ、この辺の海を袖が浦といい、汐干狩が行なわれた。

うららかさ品川沖へかちはだし 葉十一(二七二)

品川のひがたがむすこうんのつき (二九二)

と川柳に詠まれていた。こゝ見ると遊ぶばかりが詠まれているが、たいていの旅人は先を急いであるいたのである。

あの元氣よう戸塚まで行かうぞい (二〇一)

という句がある。戸塚まで十里(三九・二キ)

ロ) 初日は戸塚泊りが普通であつた。

### 阪井久良伎翁建碑

—ご協力ください(詳細本社宛へ)

川柳中興の祖、阪井久良伎先生は、明治二年神奈川県久良岐郡野毛に生まれ、名を弁、はじめ徒然坊後久良岐と号し後年川柳久良伎と自称される。

明治十年神奈川中学校に入学、同十二年東京九段富士見町に父と共に移住、国学者渡辺重石丸翁の家塾道生館に入り国学漢学を修める。

明治十六年神田共立英語学校入学。同期生に正岡子規がいた。高等師範国文科に入学。

明治十七年春、島津久光公に謁し、帰途名張で藤堂男爵家に滞在中、五世川柳編「絵本柳多留」を読んで子供心に興味を覚える。

翁は明治二十九年報知新聞に入社。その後日本新聞、電報新聞などを経て、同三十七年六月川柳久良伎社を創立「川柳五月鯉」同四十年「獅子頭」を發行。

昭和二十年四月三日七十七歳で逝去。

建立場所 千葉県市川市国分寺境内

建立月日 昭和四十六年四月初旬

募金 額 一口五〇〇円

募金目標額 金百五十万円

委員長 富士野鞍馬

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から  
一〇〇〇円迄

大阪・東京・京都  
3店に共通です



ば 諸 条  
ん 本 日  
ん 日 四  
大 東 京 都

高島屋

同人吟

## 秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

俾うすき人への言葉行きつまり

高橋 千万里

世の中には、不運といふのか不倖せの続く人をよくみかける。然しこの人々に何もしてあげられない程、我々の現実は厳しい生活である。

せめて、慰めの言葉でもと思うが……何からぞらしさを感じて、ついその言葉に行きづまるといふ、句主の良心を尊いと思う。

雑草を見詰めて希望持ち直し

馬場 魚山

長い人生には、幾度か厚い壁にぶつかる事がある。そんな時にフト、たくましい雑草の伸びを見つめて、新しい光明を見出したといふ句主の心境に、幸こそあれと祈る。

疑わず先頭を切る蟻の列

奥谷 弘朗

「四十にして不惑す」という言葉も死語になつた今。人生とは：家庭生活とは？と一応、懐疑的な思想をもちだすのが、生活もやや安定しかけた四十代に多い。

ふと蟻の列を眺めて、その先頭を切るボスの、信念に充ちた姿に打たれ、新しい人生観が生れたといふ句であろうか。

過疎の地にお地蔵様と桜咲く

大森 嬬句楽

非情な社会構造の変革は、過疎、過密といふようなアンバランスも作つてゆく。

その中で、いつの世に誰が寄進したのか、道ばたのお地蔵様と、万葉の桜は百年一日の如く、我々人間をジィッと見つめている。

風雲の維新を偲ぶ萩の雨

松川 杜的

紀行吟として実に感銘を深くする句である、静かに、時代の推移を見つめている武家屋敷の、崩れかかった土塀に降りそそぐ雨の一筋、一筋に国の歴史が織りなされてゆくように偲ばれる。

清流に鋏を洗つて過疎でよし

松本 忠三

「農業近代化」というなじめない言葉で、ゴマカシしているような為政者の態度に、今は怒りすら感じなくなり、一日の農耕を終えて鋏を洗い「過疎でよし」と強く言い切つた、

その決意を尊しとする。

爪を切るその爪もろく老いきさす

中川 晃男

生老病死の四苦はお釈迦さまの教え、さわりながら、我身に老いのきさしをみた時、えも知れぬ寂寥感におそわれるのも人間の業であろう。

俺を愛し俺を牛耳るこの寝顔

志賀 木石

大変、ユーモラスな句として頂いた。無心に寝入る妻の顔、六十年の不作と思う時もあり、又自分には過ぎた妻だと感謝したい時もある。所詮、男は勝手な者なのか。

若かりし頃の夫をふと求め

伏見 茂美

酒の量も適度に下り、午前さまや朝帰りでもヤイノ、ヤイノと言つたのも一昔前。従順な夫というより、フアイトすら抜けてしまった姿に「やはり昔の方が」と思うのは、女の勝手というものである。

フト妻の居ない我が家を想像し

児島 与呂志

「免に角、子供達が大きくなる迄は」と夫婦間の不平不満にもジィッと耐えて幾歳、今は幸せな安定ホーム、妻がふとした風邪で寝込んだ時「若しも」と妻なき我家を考えた夫の心理をよく詠まれている。

近作柳櫛

# 秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

父の顔写真一枚しか知らず

羽田 一扇

一枚しかない父の写真—この父は若くして逝ったか。それともある事情で離婚した母が後生大切にもっていたか。又正面きって父と呼べない子供が、何かの拍子に見つけて、母になじるとそれはあなたのお父さんです、と打ちあげられたのか。暎の父の写真が一枚しかないところに、世の中があり、ドラマがあり、ロマンがある。父の顔を上五にもってきたところ、印象的です。それからそれへと追想をよぶ、佳句として推賞したい。

しまい風呂嫁ぬる好きと云ってくれ

植田 英詩

断絶だ、核家族だ、なんだかんだと言うて

いるが、まだまだこんな家庭のあることが大変嬉しい。些か古川柳調だが、良い家庭川柳だなあと思わせる。下五の云ってくれは云うてくれの方が柔らかく又上の句と合うのではないか。

無為無策自画像を白で描く

来住 タカ子

大策は無策に如かず、大欲は無欲に似たり。自画像を白で描くとはうまく言い得ている。前二句も然りだが、作者は綺麗な言葉で上手に駆使する。

冗談をハツシと返し未亡人

古野 伶人

言い寄れば言い寄るで、言い寄らねば寄らぬで、とかく未亡人の心理は複雑だ。この場合のハツシはノーではあるが、ハツシと返しとあとの淋しさ。

あじさいの色変わりして妖婦めき

東原 福子

紫に黄に桃色に、色変りする犬でまりの紫陽花の花を見て妖婦めきと感ぜられた作者は健康で誠に結構です。あじさいの色変るこの熱が出るという句をみたことがあるがこの方は、胸を患うておられた方でした。妖婦めきという言葉から上五のあじさいは漢字の紫

陽花と書かれた方がより妖婦めくのじやないでしょうか。

プロレスを見てからあとの字が乱れ

安藤 桂仙

人間は環境の動物と言われるが、荒々しいものを見れば荒々しく、やさしいものをみれば、やさしく、なる人間の弱さを、面白い事象を以て、うたっている。あと二句も同様、この作者は大変奇抜な表現力をもっておられる。構想も面白い。御活躍をお祈りする。

公害ニモメゲズを賢治書き忘れ

平井 露芳

例の宮沢賢治氏の有名な。雨ニモメケズ、風ニモメケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモ負ケヌという詩をもってきて、今やかましい公害問題をうたったところは、時事川柳としては、優秀なものである。ニモメゲズと片仮名にしたところが、原文の詩を尊重して誠に結構であるが、賢治の詩はメゲズでなくマケズであると記憶している。

以下佳句

御破算で願ひ赤字確かめる

英詩

眼のはして器用に看視されていた

史朗

人生の序列上等兵どまり

都留逸

子が居ない夫婦に風呂がわきすすぎる

政己

セックスに触れて法話は今佳境

夏生

# 虫明の宿 (3)

## 西尾 栞

せんべいが出て、抹茶を供せられた。せんべいは熊が鮭を荷負うている絵であった。おや北海道のせんべいだねとつぶやくと、よくぞ存知でと夕べの、ふな子さんがこたえた。「北海道のせんべいを、鹿児島の人に供せられて、岡山で喰べるとは」

と私は思わず、口にした。因みにこの、ふな子さんは、鹿児島出身だということを、昨夜の宴席で聞いた。

皆が揃うたので朝の膳についた。猪口を持つと女房質においても、昔からの言葉が誰かが吐いた。そして旅の宿の朝酒ほど、楽しくもまた旨いものはないと、口口に言った。

夕べの打合せの通り、生々庵と久志良は、

一足先にタクシーで墓参にたった。玄関の櫃には、先刻頼んであった、植木が、ハトロン紙に包まれて、紐でくくられた、提げころの荷物が出来ていた。見ると、二十糎余りの千両と、沈丁花であった。千両は、つきにくい木ですから、実生がいいでしょうと言っていて、赤、白の実をいれた、古封筒も、添えられていた。このご親切に深く厚く感謝して、虫明東のバス停まで、吉元さんに送られて歩いた。

雨は又ポロポロして来た。これじや、夢二の歌碑は迎も無理だから、割愛しようと言ふことになった。私は多数決に押しきられて、黙ってしまった。

バスは定時の八時三十八分に細雨に煙る、虫明の町を後にした。久米雄氏と自分は同じシートに並んだ。バスが福谷の停留所まで来

雨に濡れた黒井山道という道標が、岐れ道に立っていた。黒井山は、昔弘法大師巡業の砌、古井戸にて、衣を洗われた、その衣をこの部落の間口というところの海中の大岩にかけて、乾かされた。という伝説で、裳掛岩というのがある。虫明が邑久町に合併前は、裳掛村というていたそうだ。毎年旧六月十七日には、お衣洗いというお祭があるということである。

夕べ暗がりて教えられた屋敷跡には、莫の広い葉が、行儀よく並んでいた。宿へかえる時、自分は皆からわかれて、一人雨上りの新緑の庭に歩を移した。

松、梅、石榴、山梔、桜、柏、笹、金木犀、銀木犀、珊瑚樹、千両、万両、沈丁花、椿、蟻通、山茶花、檜、と数えてゆけばきりがなかった。若葉の緑りが目をそばたてた。特に檜の若葉の美しさは、艶々しさは、得もいわれなかった。スモッグのない、樹々の青葉は、みな嬉しそうだった。五月の雨を充分汲うた苔の色の鮮やかさは、ピロイドのよう

だった。

自分は旅をすると、その行く先、行く先の宿で、ちょっとした植木の苗をもらって帰って、記念の樹にしている。今朝起きると、山を背にした周囲の樹木を見ながら、今日は良い土産が沢山あるぞと、ひとりほくそ笑んでいた。

もう一人の女中さんの姿が見えたので、厚かましく、そのことを頼むと、入れ替りに、昨夜の千鶴女さんが、手鎌をもって出てこられて、『何が良いでしょうか、好きなものを揃って下さい』と親切に言うて下さった。

流石は由緒ある庭、百年いや二百年、苔むした土に、どうしても鎌をいれられず、誠に有難いお言葉ながら、どうしても鎌をいれられないので、何でも結構ですからお願いしませうと、

『それでは後程若い者に、掘らして進ませませ』と言つて厨の方へゆかれた。

室へ戻ると、牡丹の正面の位置に、四五人たむろしていた。

ると故障した。運転手と助手は、スッパナを持って車内を後ろへ走っていったが、仲々繕らなかつた。退屈した乗客は三人四人と下りた。この農家の庭先にも、四五本の牡丹の花が満開だった。ここで三林坊さんは、蕪の新芽の手頃なのを、とって来て私にくれた。又虎杖もとってきて、子供のようにな、しがんで酔っぱい顔をされた。故障車は遂に繕らず交替車が来ることになった。この故障については、運転手も、車掌も一言の挨拶も説明もしなかつた。癪にさわって、バスをにらみつけると、バスの腹には両備バスと書いてあった。この故障がせめて、夢二の歌碑の前であつたらと思うと、残念でならなかつた。

## 西尾 栞 著



### 肉筆揮毫の句を挿入

しと身に泌みた。その夢二の故郷へ来て居りながら、その故郷の土を踏めない縁しを、つくづく悲しく思った。

紫に小草がうへへ影落ちぬ  
野の春風に髪けづる朝

夢二画集にあった、ある頁の思い出の歌である。

自分達が並んだシートの中の席には、二十才前後の娘さんが、紺の服を着て座っていた。それが偶然、乗った時から、又乗りかえた時からの前後だった。

『朝パラパラに傘持つな』という響えを破つて、ここまで来た時には、今日の雨天はもうのがれられない雨脚となっていた。

バスは西大寺町で乗り換えて、天満屋行のバスになった。車の数はふえて、雨の岡山市

序文 麻生葭乃先生  
中島生々庵主幹

## 集句 『水鶏笛』

六〇〇円 一共

大阪市南区鯉谷仲之町二〇

発行所 川柳塔社

は都会の形相となつて来た。  
フト見ると、今度は前の席に、先刻の紺の服着た娘さんが肩を並べていた。自分達と丁度入れ替つたわけだ。後ろからは話し易い。  
『虫明から乗って来たね』

『ハイ』

『どこかに勤めているんだね』

『ハイ』

『あてて見ようか』

『あててごらん』

『横山製網だらう』

『よくあたりました』

『国はどちら？』

『私は岡山よ』

『君は』

『私は山口県よ』

『そう、玉江、それとも仙崎』

『先島よ』

『これからどこへ？』

『天満屋へショッピング』

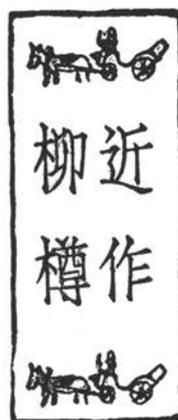
バスは深いビルの谷間に入って、静かに停つた。終点の天満屋だった。

ここで又タクシーに乗りかえて、今日の会場へ五分にして着いた。会場には、先に発つた、生々庵氏と久志良氏が到着していた。雨は愈々はげしく降つて来た。

この雨が今日の会の挨拶となり、自己紹介に大変役立つ五月の雨となった。そして岡山の思い出は、満開の牡丹に降る静かな雨の虹のような思い出である。

(終)

(前号42P12行目の縦帳は画帳と訂正)



北川春巢選

大阪市 阪上十止庵

口紅の濃さ三十をこえんとす  
いつしかに素顔を見せぬ娘となりぬ  
知らぬ間に幸運が来た太い指

ありあまる力を山に捨ててに行く

時々は愛を確認する喧嘩

始発待つ人とはなれて朝帰り

大阪市 小出智子

倅な女にふだん着が似合う  
シグナルを待つ間も女ボーイズする  
核家族父独酌の夜が続く

靴揃え愛も情性の日が続く

疵だらけの未練を鏡との対話

尼崎市 中谷利美

ちゃん付けで呼ぶ母親と出たがらず  
忘れたい人にこの子が生き写し

マイペース美人の酌に狂わされ

手切金 そこで仮面を脱ぐ女

平凡な後のカラスに追抜かれ

島根県 堀江芳子

うちの孫だったら叱るところでほめ

後悔は内緒話が洩れてから

涙もろくなって他人へ気を使い

人間のつけた値知らず鯉泳ぐ

竹原市 三宅不朽

うつしみのいつまで父ぞ子と花火

マリアには遠し女母乳捨て

いまも朱に臉の染る朱の春日

塔ちかく遠くははのごと胸に入る

大阪市 小谷葉子

レターイン谷間に喘ぐ音響き

後編は惑わずバラ色突進す

朝酒と抹茶湯の町に別れ告げ

京都花の寺

一人来てひとりに出合う花の寺

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

日本の罪悪感に起伏あり

はねつるべみめ美しき少女住み

要領で米は作れぬおもしろし

仏さまの分にも種を播いておく

羽曳野市 前 川 桂 馬

鰻屋で手術の疵が痛み出し

佳いことの着付へ匂うナフタリン

紅薄く塗ってピエロの悲しい日

どっちでも良いが美人へ署名ペン

大阪市 堀 口 欣 一

米よこせ運動などがあつたころ

日曜の混みよう家がせまいから

研修費などとみんな飲んだ金

禁煙をして喫煙が馬鹿に見え

大阪市 大 西 為 二

魂が痛い団扇でたたかれて

妻楊枝の先で教える生字引

風呂敷で氷を包む美しさ

交番へ信号無視の出勤来る

大阪市 河 野 君 子

ポーナスへ禿鷹に似た子沢山

カドミウムのおまげが付いて豊年だ

消費時代繕い知らぬ娘に育ち

大阪市 江 城 修 史

くたびれた愛へ真紅のバラ匂う

背信の人の歩巾が広すぎる

歳月の果てが寡婦をば陽気にし

東大阪市 宮 西 弥 生

逃げ腰のつもりになって先きに酔い

ドラマもつ破調になって女去り

唇がさびし誤解の解けぬまま

守口市 岸 本 豊 平 次

秒針を殺して過疎の村に老け

悪銭でないに遺産が身につかず

植木市素通りしてる？DK

熊本市 黒 田 緑

振幅の狭い怯懦なくらしむき

ナツメロへ盆いまさらに友の顔

変なもの居る知名度という魔物

八代市 船 木 史 朗

どたん場に来てそれだけの人と知り

架けさせておいて渡らぬ歩道橋

笑つたのに故里で死にたがり

神戸市 来住タカ子

愛の風袂をくぐって胸ぬけて

ひと言の嘘に風船われました

確信の無いこの道を二人ゆく

竹原市 脇本政己

休耕田故人になれと話そうか

進歩と調和まだ入れないながい列

カニよいかれダンブへつめをふりあげろ

大阪市 里小路

なんぼ程とられるとこで酔えもせず

嫁が来て若い料理に引ずられ

小瓶一本で吊皮二つ持ち

京都府 矢野晴光

万博で若き日の夢よみがえり

終電車女房の誕生日思い出し

鉄筋のビルの中なる赤のれん

岡山県 武元柳子

酒代も早乙女賃もはね上り

言いくいこと言う団扇手に持って

楽しさが踊の顔に手に足に

和歌山県 ぶきあげ虎城

償いのたしにもならぬことも添え

敗北のテレビに軍歌流れ去る

愛憎を刻み悲劇の幕とする

米子市 増田竹馬

一度切りの人生この道かけて見る

子が継がぬかも知れぬ職朝を出る

白内障やたら眼鏡を拭いてみる

鳥取市 有田鹿の子

山の青すがりつきたい雨上り

帰省子へせめてくつろぐゆかた縫う

見守ってくれる先祖へ花を植え

竹原市 楠美佐雄

晩酌の父善人の顔となり

自我意識過剰で未婚続きそう

縁談は良かれ悪かれ迷う葦

兵庫県 荒井良枝

十円でもう泣き止まぬ年になり

泣かされて来た子をあやし手内職

サングラスかけ道ならぬ人と乗り

岡山県 目賀芳月

ホタル灯もネオンも恋し世に生れ  
がめつさを見せず本堂でかしこまり  
更年期妻の寝顔の阿呆らしさ

和歌山市 中 筋 朋 子

口ぐせも良し気休めになるならば  
よそゆきを着せられおいたしそこない  
悩みとは別に童謡くちずさむ

島根県 志 賀 美 栄

春愁よマリヤに似たるおぼろ月  
思慕深くたたんで雨の音といる  
直通へ距離を忘れた長話

新宮市 大 矢 十 郎

今に見て居れへ光陰矢の如し  
入信の女とてつもなくしゃべり  
反論に涙の妻の針動く

岡山市 武 内 雅 堂

人妻と歩くりズムに過去がある  
妹の趣味を他人に尋ねられ  
口笛を吹いて逆うパンタロン

守口市 野 呂 杜 月

一週の早さを語り見るドラマ

公害の記事に蠅打つ手に力  
多すぎた一言故にせまく居る

羽曳野市 麻 野 幽 立

晴耕雨読で行くさと父のさりげなく  
黒髪が自慢で持てぬのをなげき  
休耕にしても惜しいぞレンゲ咲く

大洲市 堀 内 暁 風

苦勞性孫の行末まで案じ  
暗闇にライトがついてみな黙り  
その若き医者も聞いてる長寿法

鳥取県 両 川 洋 々

無い袖も振れとストライキを構え  
手の内を読んだか鮎も寄り付かず  
柵のもの取るに手頃な子が呼ばれ

鳥取県 林 隆 子

病む人は水さえのどで持て余し  
ぞうきんのような心で世を渡り  
御主人の浮気も知らぬ子守唄

岡山市 谷 森 和 風

叱られる孫の肩もち叱られる  
縁談に先祖のお墓も見て帰り  
役職に似合ったような顔になり

新潟県 高野不二

デパートで合鍵作り世は平和  
カラー買えと寿命が来たテレビ  
アリバイに男同士の匂がし

米子市 石垣花子

トンネルの窓に教わるみだれ髪  
習いたて踊って見せる夜の茶の間  
旗だけをしまい忘れた海の店

仙台市 川村映輝

老人を意識してから疲れが出  
逆境の過去が育てた今の地位  
三ちゃんでもやっても米が有りあまり

島根県 榊原秀子

残り福わが娘にあると信じる日  
安全旗つかれましたの色で立ち  
宝石も溜息きけばつらかるな

鳥取市 藤本佳女

偏屈を好きと言う娘もへそ曲り  
ゼラシーも消えて初老の坂に佇ち  
ごまかしの多い世相へサン格拉斯

出雲市 竹内李朋

兄弟で左右から注ぐ喜寿の酒  
うれしさは山中節の酔心地  
口笛と犬新緑へ走り出し

出雲市 石倉晃

模型機が空でかち合う春日和  
子の親になっても母に見送られ  
人妻の倅せ里も忘れて居

今治市 今井松花

蚊帳吊って調子外れの詩を吟じ  
欠航で得た休日を持てあまし  
梅雨くらし老婆の襟刺ってやる

今治市 古野伶人

旅先の躰の事も読む弔辞  
坐るにも立つにも骨が音を立て  
待たさずに化粧が出来る齢になり

今治市 原田輝親

万国博日本庭園(一句)  
何国の人か一会の茶を共に

長雨の晴れ間キャベツも馬齢暮も  
出不精が見送りに来て春の月

東大阪市 斎藤三十四

父の喜寿

ビルの朝出勤の群前傾す

五十五才万歩の会に誘われる

黄泉の路で悪友に会った夢

広島市 植田英詩

気味悪い程に開店愛想よい

琴の音も聞かせて万博いいムード

鳥取市 近藤秋星

万博の代りに海へ連れて行き

飲み仲間裏も表も知っており

鳥根県 錦織文子

一杯のビールお世辞をまだ言わせ

すばらしい音譜のせたい 虹の線

小松市 村井城南

八百長と馬は知らない鼻の息

泣いたまま通園バスにつめこまれ

鳥取市 山形春海

又お相撲愚痴云う妻がいて楽し

幸運が巡って来そうに空が澄み

諫早市 原田明春

下手なりの唄にも坊やねんねする

ワクチンの犠牲国会あわてさせ

広島市 南条露声

ぱっくりと逝かれてからの寺詣り

誕生日おめでとうテレビ売る心算

宿毛市 山本窓花

人生のつまずきつまずき幅が出来

万博の広場へ阿波の緋がこぼれ

鳥根県 大森孝華

うぬぼれの友の軌道へ反射鏡

大空へ愛の鎖を解く自信

今治市 渡辺南奉

髪染めて女一人が悲しい日

灯をつけて一人の城をあげ渡す

大阪市 藤田頂留子

デモのよに規制されつつ行く地車

お渡りも車に勝てず露地を行く

熊本市 高野宵草

旅行客十把ひとからげにしてジャンボ

寝台車の枕へ故郷に急ぐ音

八代市 船木きよ

賢いと云われたくないのもおんな

停年へ時計くださるのも皮肉

七尾市 松高秀峰

全快が近くベッドのきしむ音

夏休み返上教師にある誇り

鳥根県 大峠可動

家中の子供を借りる農繁期

糧を曳く蟻も貧しい語にびたり

大阪市 西本保夫

まだ席につかぬに平社員すぐ呼ばれ

平社員のロマンス皆は聞いとらず

岡山県 山田止水

小言とも知らずに奥へ良い返事

里芋の葉っぱが走る俄雨

鳥根県 東原福子

参道を導くように紋白蝶

手花火に親まで夢中夏祭り

大田市 藤田軒太楼

言募る妻の矛盾に負けておき

夕映に恋の名残りが影が伸び

羽咋市 三宅ろ亭

人ごとのように留年すると言ひ

つけられた値のわく内に農夫生き

大阪市 平井露芳

滅反に協力をしておかゆ食べ

奥の奥極めて競馬尚勝てず

松原市 守屋万竿

体操と笑って居れず息が切れ

ミニはいた娘と見えず訪問着

鳥取県 林露杖

愚痴ならべ揚句おのろけきかされる

研修の窓に涼風もつと吹け

泉佐野市 大工静子

いたいとこついで説教師金になり

丹精で仏も家も花の中

西宮市 丸山孔一

叔父の死

せめてものなぐさめ安らかな死顔

厚化粧心の乱れ塗り切れず

大阪市 白石良圭

見るだけで心を奪うのも恋か

しあわせになる花束として受ける

愛媛県 渡辺都留逸

古本屋死中の活に似たもうけ

日曜のバスはもうけぬ顔で乗り

大阪市 岡本まさひろ

超ミニで足は顔より物を言ひ

長い足スラリとしてミニが生き

八尾市 飯田一治

長生きで最初の二人になって住み

セールスが三親等にも腰をすえ

堺市 栗本藤持

幾たびの手術に生きてきょうの古稀

街中はお地藏さんの花も褪せ

竹原市 楠 貞子

生花も枯れて病院不気味なり

聴診器艶のない肌さらけ出し 岡山市 泉 万寿

恋愛をしてから干支を口にせず

台風はポール気象庁のアンパイヤ 大阪市 岩 崎 信 二

盗難に会って月給知れ渡り

長雨に賞与つまらぬ事で消え 富田林市 川 端 文 一

持つものを持てばおだてにそっぽむき

あほらしい濡れ衣きるも秘書の役 高槻市 山 田 スミ子

生きる道汗が出るからそれでよし

先生の缺が花へ遠慮せず 今治市 大 本 バット

平凡な主婦の座にいてメロドラマ

新妻は平凡だけど瑞々し 今治市 伊 藤 一 郎

孔雀より貰いの多い猿の檻

叱られて泣く茶の弟子の白い足袋 今治市 真 山 国 彦

陽の高い内から仕舞う耕耘機  
すべり台デートの始終見届ける

鳥取市 藤 本 和 宏

義理堅い男で底辺抜け切れず

庇理屈を並べ偏屈妥協せず 和歌山県 加 納 花 秀

新人に待ったをかけたプロのかべ

ソロバンよまだまだ君の世がつづく 大阪市 吉 野 志 津

立膝でミスコンパースお茶の会

仲のよさ車椅子での嫁姑 大阪市 木 村 久 子

儲けたか薬屋値下げ断行し

手をひかれながら息子へ気イつけや 大阪市 木 村 渥 水

お年寄りゆっくり急ぐにわか雨

赤ん坊と親子対面てれくさい 大阪市 田 中 多 幸

停退もボーマナス話に耳をたて

片言の君が代うたう孫を抱き 大阪市 花 田 繁 子

ひとり者つらい別れも無い果報

ひと盥廻わして初物喜こばれ

大阪市 松岡進

天災と恵みを秘めて雨は降り  
和歌山市 樫村ふみよ

ヘソが出た海水着着て身だしなみ  
親子では無いがぐれずに子が育ち

不機嫌は切口上にあらわれる  
和歌山市 中西喜美子

大阪市 松岡茶々坊

共かせぎ朝のラッシュに子を叱り  
和歌山市 中西喜美子

梅雨を待つ傘屋の気持良く分り  
貧乏のお蔭還暦つい忘れ

新人にファンの期待が大き過ぎ  
東京都 加藤とらじ

河内長野市 森本黒天子

長髪もミニも希望を胸に秘め  
和歌山県 塩見博年

手許不如意送金を待つ年齢となり

ラーメンに別れかなしとチョンガーが  
和歌山県 辻本拓

寝屋川市 福富隆子

腰痛と水虫定退ついでくる

ソロバンを鞆に計算機のセールスマン  
大阪市 岡部シゲ

竹原市 生信笑子

窓閉めて一人言にもなれてくる

人込みで片目おとしたコンタクト  
大阪市 村島秀村

笠岡市 山本柏生

倒産はクモの巣だけが遠慮せず

親子して親子丼食うも旅  
大阪市 今井隼人

東大阪市 落合思月

歩道橋母は田舎を恋しがり

譲られし席に彼女の温みあり  
大阪市 今井隼人

島根県 中島英子

几帳面にすれば偏屈者にされ

ひとり居てラジオに相槌うっている  
大阪市 本間満津子

愛媛県 西田夫生

化学力次々風流消すばかり

経唱えいても孫の悪戯見え  
大阪市 広畑賛平

鳥取市 藤本鎮也

女房子は要らぬと偏屈五十過ぎ

鳥取市 藤本恵子

鳥取市 藤本恵子

# あの日のあの人のこの思い出

— 故後藤梅志氏に捧ぐ —  
野 火

直原七面山

## 名幹事緑雨さん

吉田 水車

路郎先生に私が師事した昭和六年頃には緑雨さんは円熟の作家として、かつ川柳雑誌の創刊以来その事務所を受持たれ、今も同じ東住吉区平野の町の自宅を提供され、作句はもとより雑誌発行、句会等に努力して居られた。私も校正のお手伝いに度々参上したものであった。緑雨さんは啞々の話しぶりではあったがなかなか話し好きで、ずいぶん長座して、奥様に大へんなお世話になった、その奥様に緑雨さんに先き立たれてしまわれた。川雑の句会に緑雨さんの姿を見かけないことはまずなかった。あまり大酒はやらなかったが酒と雲囲気が好きらしく、当時の句会等の後には緑雨さん顔利きの料亭に有志連中が、よくくり込んだものであった、その時の楽屋落ちの句に

宴会で緑雨が立つとつけが来る、とか何とかがあったとおもう、つまり割勘の集金のタイミングも堂に入ったものであった、こんな愉快な一面をもつ緑雨さんでもあった。

緑雨さんの句集「街の雑音」は路郎先生の厚文字で飾られ、昭和十一年六月に刊行された、先生の序に「緑雨君の処女句集「街の雑音」がよいよ世に出ることになった。私としては私の句集が出るよりも嬉しいのである。街気の少しもない句、彼の生活をそのまま投げ出したような句、云々とあるように緑雨さんの人と成りがよくうかがえる、句のぬくもりのいまだに伝わる句集を再誦して、その感吟を左にかかけて、せつにご冥福を祈る次第である。

父となった喜びに帯がゆるみ企てに父は驚くまいことか

病院にて

宿直が起される度一人死に病室の満月が気がやわらげる呼びいでもよいかと枕許で聞き

立 山

頂上を立てば日本は山ばかり折靴のかがとがありませぬ腕組をすればからだは骨ばかり利子ばかり言うて少しも貯めていず貧しさに子はばらばらになってつとめ

甲 吟

名吟とともに残せよ西之町

水 車

一度もお目にかかったことはなかったのだが、梅志氏逝くの報に接した時、私は十九平氏逝くの報に接した時と同じように、(その質は多少異っていたとは言え)心の中に大きな空洞の出来るのをどうすることも出来なかった。言わば梅志氏は私にとって、(変な言い現わし方だが)全く未知な親しい柳友であり、そして親近感の最も深い柳人の一人であった。私が梅志の存在を深く認識したのは、誠に奇妙ないきさつからであった。それは、路郎師がまだ御健在で盛んに「秀句鑑賞」をお書きになっておられた頃のことである。

私は師が取り上げられた秀句の中から(私の目から見て)欠点のある句を一回に五、六句ずつ拾い出し、この句は一応秀句ではあるけれども、この句はこの点にこう言つた欠点がある。

従つて、この句のここをこういう風に直せば、この句は原句に比べて語調も姿も誠に良くなり、句意の面においてもこんなにも重厚さを増し、また句品も倍加され、余情、余韻も殊の外加味されて一層光り輝くではないかと言つた風な(その時の題目は全然忘れてしまったが)ものを書いて、三分位位を一度に編集局に送り込んだことがある。ところが、その原稿の第一編が川柳雑誌に発表されたその直ぐ後で、私は突然編集局か



# 粹きな文蝶氏

不二田一三夫

白骨になっても抱き合つたまま、心中され  
た香林、若菜ご夫妻。墨一枚ふさぐのみとい  
う足腰立たぬ葉光さんなど、亡くなった人の  
思い出は胸が痛むもの、しかし土井文蝶氏の  
場合は、なにがスカッとしたり、爽やかさだけ  
が残っている。

映画館のうちの売店が火災にあい、うどん  
一杯食う金にもこまつていたところ、泣きつ  
つらを見せなかつたためか、そこまできん  
だろ生活をしているとは誰も知らなかつたよう  
だが、苦勞人の文蝶氏にはお見通しだつた。

「一三夫さん、タバコを一本くれんかな」  
とボクが差しだすハコを手にして、  
「ありがとう」とボクの手に戻し、何気な  
く一本吸おうとしたら、千円札が小さくた  
んでハコの中にはいっていた。

当時文蝶氏は不朽洞会の理事長だつたが、  
あの日の粹きなあつかいは今もつて忘れられ  
ないことである。

# 梅志さんと川柳

西 いわを

「梅志句集出版披露の会」に引続き金婚式  
を多田神社三楽園で挙げられたのが十一月三日  
日であつたことは既報の通りである。突然一  
月二日大手前病院へ入院されたと奥さんの代

筆で御通知を頂いて暫し案じて居つたのも東  
の間十五日急遽他界されたと電報を受取つて  
大いに驚きと悲歎に沈んだ次第である。余り  
にも早や過た運命となつた。梅志さんのお人  
柄並に川柳に熱意のあつた事は、秀句鑑賞と  
梅志句集に目を通して判ることであるから  
今更前に披露する迄もないことは明らかであ  
る。

只私が生前故人と川柳を通じて親交を結び  
幾度かの文通に依り得た川柳への力強い教訓  
ともなる言葉を更に川柳を愛好する方々へお  
伝えしたのである原文の儘抜萃して御参考  
とした。〔中略〕実は秀句鑑賞でもこの四月  
号で三八〇句卅回に実り少し疲れも来たの  
で二一カ月で辞退を申出で誰か新ら手に代つ  
てもらう積りで居りました。

しかしゲラ刷りを送られて二三日間句を眺  
め二十句あまりチェックした中から書けそう  
な句を十二三句朱いチェックをしたまま四五  
日放っておくと段々句に対する面白さが出て  
来て（勿論その四、五日間は句を反芻します  
き）書く段になれば一気に一日か一日半で書  
き上げるのですが矢張り鑑賞を書くのに生き  
甲斐を感じる自分を発見します併し最初の頃  
より疲れが出るようでは老骨になつたこ  
とを染々感じてる様の次第です。小生の主張  
は「川柳は庶民の一つの顔かたちである一句  
の中にそうなるにもかにも籠められるものでは  
ない一句一句の物の見方に作者の感じ方世の  
中への主張感懐等を見出すしかない」川柳の  
頃小生の「肅々」として公園の冬景色」と云う  
句にしても分かつてくれたのは路郎先生一人  
ぐらいかと思いますつまり「肅々」として  
分らないのでこれは「肅々」として易水寒  
し」からヒントを得た語で冬景色の中にはあ

の花が咲き遊び戯れていた子供の姿もなく草  
木の緑も消え失せて転た感慨をもようした一  
市井人がふところ手をして立つて居る姿を想  
像してもらえなさんと云う訳で注文する方が無  
理かも知れませんが文字に対してその位敏感  
でない川柳家にはなれないと自負して居る  
のです。少し脊負つて居るでしょうか句会に出  
入りするだけの川柳屋であつては困る古い  
人が勉強しないのも困りものですね（四  
三、四、一二日付）此の外断片的な想を何回  
か綴られて居られたが便箋の上だけでは限り  
がある。そこで私が退院の上は親しくお目にかか  
り懇談するのを約束して居たが私の退院が  
遅れたか梅志さんの逝かれるのが早やつたか  
でとうとう約束を果たすことが出来なかつた  
のは残念の一つである。



磨かれた伝統の味

司子集

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281  
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996  
売店・各百貨店のれん街

# 九輪抄

## 清水白柳選

倉敷市 小野 克枝

全地球萌えてわたしにひまが無い  
ジンフイズ黙って注いで飢えている  
何も知らないから善人らしく居る

竹原市 生信 笑子

生きている証拠 注射がいたいなり  
人は皆ふり向くことも知っている  
ビルの屋上 小さなアリが住んでいた

八尾市 高杉 鬼遊

化粧する時間をおんな余計生き  
流行のしぼりはおしめにも似合い

和歌山市 中筋 朋子

真夜中の雨は一粒ずつきこえ  
跣足の青春水平線を語る

倉敷市 水粉 千翁

潔白をなじる者に海が寄せ  
逆境へ靴の裏打ち忘れない

神戸市 来住タカ子

香水を捨てて愛撫とつめかえる  
無礼雑言にくめないえくぼ持つ

竹原市 時広 一路

金銀銅その銅にまでまだ遠い  
黙々と適所といえぬ職を生き

小松市 村井 城南

物わかり良すぎ裏側考えず  
冷暖房完備と女工さん募集

大阪市 阪上十庵

妻の手をダイヤの似合う手にしたし  
背信のいよいよ美しき彼女

大阪市 中川 滋雀

さかさまに馴れさかさまに歩けない  
気がつけば駄馬の烙印背負うてた

倉敷市 中島 末子

寡婦脱皮生命あずける海が荒れ  
みんなもう帰り喪中の鎖切る

今治市 月原 宵明

偽装して夜の男と戦かわん  
白百合の気高き中のエゴイズム

高根県 榎原 秀子

宿命では燃えつきるまでゆけという  
したいこと山積にして流される

大阪市 江城 修史

南京豆女の性に似て固し  
背信の哀れ孤独の影を踏む

大阪市 小谷 葉子

云い訳はよそう十字架がくもる  
フラッシュへ恋の炎を置いて去る

東大阪市 久米奈良子

論争に女が勝てば嫌われる  
愛の自信空間に書く指の文字

大阪市 吉岡 美房

マスコミに己を責める筆がない

岡山市 泉 万寿

後ろ向きに歩めば野原も広い  
巣を守る蜂に缺が使えない

東大阪市 竹中 肖二

歴史とは哀しい浪費かも知れず  
運河の如きラッシュの中の孤独

神戸市 仲どんたく

指で書く恋という字を浪が消す  
腹が立つ夫へ左手で渡し

八尾市 香川 酔々

雑念を払う日ソーダ水の泡  
何想うたかひまわりが陽へ背き

岡山市 川端 柳子

竹原市 森井 菁居

島根県 小砂 白汀

立て板に水一滴も止どまらず  
人の歴史を人間の手は知っている

大阪市 正本 水客

羅に包む愛憎さりげなく  
富田林市

岩田 美代

誘うのは腰のくずれてゐる女  
岡山県

出原 敬一

山の色は三百六十五色です  
愛媛県

渡辺 暁童

まな板よなんとか云えよ俺のせて  
大阪市

神谷凡九郎

社用族の端くれ領収書をかかし  
倉敷市

竹内 翁重

末っ子へ甘えてるのが母であり  
羽咋市

三宅 ろ亭

もつべき妻なり妻に感謝する  
松江市

岡崎 祥月

適当にお世辞も云えて人格者  
大阪市

木村 水洞

梅雨空を覗きに二階まであがり  
下関市

桜川 不水

一笑に付しては欲しくない女  
島根県

堀江 芳子

世話好きが病 愚痴るのも日課  
姫路市

村上 春巳

アニマルでよし最大の武器は金  
松江市

柳楽 鶴丸

子の寝顔に卑怯にも詫びてゐる  
熊本県

有働 芳仙

倉吉市

奥谷 弘朗

月給をみな取りあげる内助にて  
八代市

船木 史朗

よくもまア燃え尽きないで生きて来た  
大阪市

宮尾あいき

みじめさを見せまい涙のみ下す  
小松市

馬場 魚山

軍人勅諭途切れ途切れている覚え  
鳥取市

近藤 秋星

おん鶏が啼き蟬が啼き僕が起き  
藤井寺市

西 いわを

寝転んで読む癖がつくベッドの灯  
下関市

志賀 木石

余生又 おぶさる妻の背を流す  
小松市

四方天弘実

どん底のねばり血となり肉となる  
島根県

堀江 正朗

階段を数え大阪えらいとこ  
法要へ下駄カタカタと戻りそう  
大阪市

橋高 薫風

天神祭

御旗講揃いの浴衣浪を染め  
一目惚れしてすれ違ふ涼み舟  
東大阪市

竹中 綾女

花終えた紫陽花軽く首切られる  
ぼうふらが暫く子供遊ばせる  
米子市

八木 千代

ムツとした頬を卑屈な笑みにする  
適確に心のおそれ掘り出され

羽曳野市 麻野 幽玄

歳のこと云うまい妻は赤が好き  
ヌードポスターの前でバス待たされる  
和歌山市

秋月 宏方

日本人の知恵のはしくれ竹とんぼ  
腹時計畑仕事はこれですみ  
京都市

松川 杜的

日本地図を数えて旅が好き  
善光寺にて

極楽のお鍵 妻と一緒に握らされ  
青森市

工藤 甲吉

歯ざしりをして運命に立ち向かい  
逃げ場となるとあの世あるのみ  
大阪市

宮地 双葉

生と死の岐路 閻魔が笑う  
恩讐が研いだ瞳に突き刺さる  
偶像があるから信者寄って来る  
大阪市

故島野 大吉

毛と爪の延びに人生賤なし  
病んでいて母梅漬の指図する  
清水 白柳

心筋梗塞にて入院

心電図もろとも救急車に積まれ  
心筋梗塞スケジュールみなふつ飛ばし  
健康過信地獄の切符買ひ損ね  
ナチュラルクレーラー三階のベッド快よし  
病人らしくせめてヒゲなどのばそうか  
(ご心配かけましたが、八月下旬退院しま  
したので他事ながらご安心ください)

清水 白柳

主 役

国 弘 半 休 門 選

ステテコで司会つとめるのも大家  
PTAが子供の主役のこともでもめ  
よくしゃべるから主役になり出  
総代が主役で寄附をとりまとも  
四天王みんな主役の面構え  
主役もう後をおりまスケジュール  
主役から端役へひっそり忘れられ  
ためらうた主役が板についてくる  
損な主役家で女房の愚痴に耐え  
これと言う主役が居ないからも  
罵声にも耐えて主役の座を固め  
二枚目の芸が主役を引きたたせ  
どの顔も主役で舞台裏に住み  
主役にはならずコツコツ金を貯め  
金とひまだけで主役のなりたたず  
舞台では一番ポロを着る主役  
主役では無いがにくまれ役にされ  
見栄切つて主役自分を忘れかけ  
裏方をねぎらう役もある主役  
主役交替 反対派もなびき  
土曜日の主役に惹かれ朝帰り  
めしを喰う時間の取れぬのが主役

料理屋へ主役で来たり俺で来る  
切られても主役はあっさり死  
主役を見に来て脇役に惚れて去に  
胸のバラがなければ主役みえず  
美しい方を主役と決めて観る  
せりふちととちり果した日の主役  
主役よりワキ役キレイな娘を揃え  
出る潮へ腹ごしらえをする主役  
ピストルで主役射たれて幕となり  
感情をおさえ理性でやる主役  
犯罪の主役は美しい女  
人妻に恋の仕草を練る主役  
厳格な主役の留守に出来たミス  
気が付けば取り残されていた主役  
チビッコの主役本番まで待てず  
主役などない金魚鉢仲がよし  
コンピュータ主役人間酷使され  
人生の主役を妻にタッチする

東半球日本が主役になる会議  
主役の座妻と母とを使い分け  
人生の主役は押し強い方  
主役とも云われおむつを替る  
醜男を売つて主役にのしあがり

雀踊子  
一治  
松花  
千翁  
新之助

木魚  
智司  
英子  
素身郎  
輝親  
曉風  
藤持  
青明  
和甫  
信二  
鶴丸  
いわを  
和宏  
保夫  
里風  
柳子  
里風  
利美

鈴

林 野 魁 光 選

軒下の風鈴夏の部屋にする  
宮参り鈴へ無心に兎は寝入り  
ペテン師も何か頼んで鳴らす鈴  
鈴の音に出れば水飴売っていた  
鈴置いて生神さんが涼をとり  
白樺を縫うて馬櫃の鈴が消え  
おかつぱの鈴がうれしい七五三  
お遍路のリズム歩幅と鈴の音と  
鈴派手に振ればおみくじ吉と出る  
コッポリの鈴デュエットの童へ唄  
十年の床老妻を鈴で呼ぶ  
誰が捨てたのか仔猫に鈴をつけ  
鈴つけて小猫いよいよ媚を売る  
清らかな鈴の音開運予感する  
キャラパンの鈴へ砂丘は暮れか  
ふるさとへ来て風鈴を聞くゆとり  
巫女が振る鈴から御利益こぼれ  
伊勢かぐら五十円だけの鈴をふり

天  
一坪へアゲ羽主役の顔でくる  
人情劇子役の主役に泣かされる

初甫  
章雅  
扇水  
信二  
可住  
どんたく  
芳仙  
曉明  
正朗  
柳子  
宵明  
里風  
白江  
春海  
代仕男  
翁童  
杜月  
雀踊子

鈴つけているのではイヤリング  
割れまいと食しばつてるように鈴  
トロイカの鈴に白夜が明けて来る

風鈴の音は昼寝をせよと鳴り  
台風のいたずら風鈴までこわし  
鈴の鳴る度に神主もうけはり

鈴のない財布になって戻って来  
露声  
肖二

大原の風鈴大原の音で鳴り  
拝殿で鈴ふって来た爽やかさ  
いわを

風鈴が夕餉の膳をのぞくよう  
文化都市鈴も平和な音で鳴り  
鶴丸

こつばりの鈴を鳴らして五条坂  
新入兎歩道を渡る鈴が鳴り  
暁童

風鈴の楽しさを増す夕涼み  
鈴振って真実一路の旅をする  
静歩

お社の鈴は晴着を見くらべる  
また鈴を落して猫の朝返り  
古方

賽銭を今入れてますと鈴を振り  
飼い猫のプライド首に鈴があり  
城南

風鈴の鳴る夜夫が帰らない  
追分は息の縫い目で鈴を振り  
里風

仕込まれて雀が器用に鳴らす鈴  
鈴の音のいのちを洗うように鳴り  
七面山

有るだけの鈴振ってから一つ買い  
風鈴へからっぽの胃を横たえる  
千翁

人  
地  
雅堂

利美  
一郎  
松花  
祥月  
和宏  
露声  
肖二  
双楽  
鶴丸  
輝親  
暁童  
季賛  
静歩  
古方  
城南  
眺風  
十止庵

呼び鈴へ女鏡を覗いて出 素身郎  
天  
風鈴へ双肌ぬいだ冷奴 春日

お祭りの余韻を家まで運ぶ鈴  
軸

又

ド

不二田一三夫選

特権は恐ろし女脱ぎたがる 軒太楼  
ヌード写真のときアート紙を使い 一郎  
あやしげなホクロが見えストリップ 雅堂

搜索の壁にヌードが二三枚 奈良子  
ピンナップヌードばかりの独身寮 翁童

あの器量ヌードせいで食える 国彦  
もし我が子ならとヌードに目を 杜月

ヌード見る女性の顔も見て帰り 新之助  
ヌードシヨウ看板娘のおきな顔 いわを

ドラマチックなヌードの舞台シヨウ 芳仙  
ライトとの勝負ヌードを盛り上げ 千翁

ヌードに出た娘と思えぬ楽屋うら 誓二  
一度だけ見たいヌードへ妻を連れ 宵明

フェースと別にヌードの白い肌 祥月  
容赦ない言葉ヌードへつきささり 柳子

同姓へやっばりヌード遠慮する 秀子  
完全に脱いでスラングから抜ける 扇水

天  
地

フィナーレ近しそろそろ脱ぎはじ  
もつとよやれいとヌードシヨウ 智司  
満員がつづくヌードが検査され 可住

昼見れば興覚めするヌード小屋 松花  
一流のヌードになってインタビュー 文子

この人にして驚いたヌード趣味 文子  
暗がりでもヌード写真をつかまされ 利美

ポケットを抑えヌードが入って 利美  
ヌードシヨウ仲居に引卒業して来る 利美

浮世絵にアンパランスのヌード見 佳女  
芸術は汀にヌード置いて見る 佳女

アロカメラヌードに光と陰の線 城南  
混血のヌードで稼ぐカメラマン 英子

ヌードをすっぱりつつむ夜となる 雀踊子  
ヌードヌード神の作のピンクの楽譜 青夜

住  
モデル料その制服を脱ぐという 里風  
すだれ越しいま行水がすんだとこ 同

出稼ぎの飯場ヌードと灰皿と 信二  
ヌード組だけがお膳にまだつかず 木魚

猥雑なヌードは足袋をはいていた 古方  
陛下と一緒に現像したヌード 鶴丸

人  
地  
古方

天  
脱ぐための衣服四五枚着るヌード 洋々

天  
古方

洋々

# 初歩教室

— 題「残」 —

本田恵二朗

四つ手綱揚りて湖畔暮れ残る

露 杖

揚りてと説明調の表現をしたばかりに、全体がくずれてしまった。描写でありたい。

(四つ手綱しずかに湖畔を暮れ残す)

露杖さんの今日は、五句ともに頂ける句材であつたが、二三字ずつ変えたと次のように生きてくることを知って欲しい。

再会の子を待つ母の手内職

露 杖

才たけてみえうるわしく売れ残り  
残飯をあさる犬の目油断せず

残さない食欲犬にママ得意

文 子

ママ得意など言つてしまわなくても、句の裏にその気持ちがあり、そこはかとなく感じ取れるような表現をしたい。

(残さない食欲に見る子の育ち)

露 杖

売切の節はご容赦が売れ残り  
なんとなく苦笑させるよ。川柳らしき川柳。

残り火のある再会がよくなり

千 代

五句それぞれの進歩の跡が見える。表現にも一歩の進歩が欲しい。精進あれ。

ご先祖が残した家訓にけつまずき  
作句意欲の上昇が見えてきた。さあ頑張れ。  
参加賞かかえて最後まで残り

一銭も残さぬ役所の年度末  
そして遂に全没。最後も亦楽しだよ。

和 風  
収と支とが、びたりと同額になるから不思議  
である。どえらい人間技である。

雅 堂  
老いの身に残暑のほうが恐くなり  
老いの身へ残暑は容赦してくれず

花 子  
言い過ぎてにがさが胸に残る夜半  
(言い過ぎて悔いが枕にまだ残り)

杜 月  
金も名も残さず二号おいて逝き  
いややどともと恐れ入らされたよ。

洋 敏  
名声と一緒に借金まで残し  
前句と比較して、微笑させざるを得ないよ。

利 美  
父親の面子残して折れてやり  
父親の面子三分残して折れておき

慶 彦  
老妻に取り残されて古寺巡り  
老妻にとり残された遍路笠

要 次  
声あけて泣いて名残りの釘打てず  
棺の釘残る涙がかすませる

誓 二  
残さずにおいしかったと箸をおき  
所謂そうですか川柳である。この句材を如何  
にして川柳にするか、考えあぐねて欲しい。

頼 次  
(ポボンポボン残さず食べた腹つづみ)  
楽しみを先に残して楽しんで

虎 城  
ありのまま告げてしまつて悔のこり  
ありのまま告げてしまつて悔のこり

近 江  
もう残る梅雨もなからう合歓も咲く  
(残り梅雨もう去んだわと合歓が咲き)

万 竿  
残ったら貯金する気が貯まらない  
残ったら貯金する気があまるけれど

一 二 三  
去り際に友が残した隙間風  
進歩と調和残すに金がかかり過ぎ

山村 祐 著

台湾の人情芝居 (三百円下共)

台湾の人情劇の様子を知る好句の読み物

発行所—東京都豊島区北大塚

一〇三三の四 森林書房

この調子が、一二三調らしいぞ。頑張れ。

悔いのない負けに人気を残しとき。新之助  
表現に、舌足らずの感がある。対社会の人、  
つまり川柳を作らぬ人達にも、よく理解して  
もらえる表現を考えねばならない。今回の五  
句全部に、そのことが言える。精進されよ。

残飯の処理器で犬猫飼いならし  
(残飯の処理器ですよと犬を飼い)

露 芳  
十七音字という小さな皿に、あれもこれも盛  
り切ることが至難だ。犬も猫もと欲張ると、  
皿からこぼれてしまう。犬だけにしておこ  
うではないか。その方がすっきりとするよ。

保 夫  
残高がゼロで幹事に引継がれ  
(新幹事残高ゼロをあてがわれ)

止 水  
謙譲の美德をパスが積み残り  
桜にもあつた末練が散り残り

同 水  
快調だな。この調子で突進されると素晴しく  
なるぞ。川柳の本流を泳ぎ給えよ。

茂 美  
残照へもう一と息の汗を拭き  
あと二句はダメだ。この一句との差が開き過  
ぎて。もう一つ頑張りが足りないぞ。

静 観 堂  
水前寺清子の帯に残るおんな  
句主の若々しい目のつけどころに驚ろかされ  
るよ。精神年齢三十五才と読んだが如何？

大 吉  
争うたほどに残らぬ遺産分け  
お気の毒さまだが、遺産分けなどそんなもの

だよ。借金というプレミヤ付きなどもある。

人生の残りを孫に托す夢 信二  
孫の可愛さは私もよく知っている。そして七  
色の夢を夢見せてくれるのも孫である。

(老残に見えて孫と對話する)  
残り布縫いだ布団に亡母匂う 綾 女

私の母は八十八才で健在だが、毎日何かを縫  
ったり編んだりしている。残り布を縫ぐこと  
など堂に入らぬものだ。老眼鏡無しでやるの  
だから、あきれかえった視力である。テレビ  
タレントの名前など、私よりよく知っている  
から、私がどわすれずと母に聞くことにし  
ている。母の自慢の一席、お退屈さま。  
残り火にも似つつ消えつきぬ希み 凡九郎  
(消えつきぬ望みのこんの火にも似て)  
残業は東南北の牌の音 軒太楼

## 島野大吉さんの思い出

西野生長

八月二日午前二時四十分、森之宮の成人  
病センターで、肝硬炎のため大吉さんは逝  
去された。六十三歳だった。  
大吉さんと商売の関係で戦前からのお  
つきあいだから、もう三十年以上にもなる。  
戦後しばらく交際がとだえたが、ある日  
偶然に出合い、私が川柳をやっていること  
を語ったところ、ぜひやりたいというので  
どんぐり川柳会へ連れていった。三年ほど  
前のことである。その時、すでに肝硬炎を  
わずらっていて、それも相当悪く、好きな  
酒も医師から止められていた。医者からも

(残業がトンナンシーベイと唇を決め)  
残り布だいいじにきて何の用なさず 静子

残り布こんなに残めるのも女  
ホステスの侍る残業と妻知らず 比呂路

妻君はちゃんと知ってごさることを知らない  
で、こんな句を吐きよったよ。そう思うとこ  
の一句楽しくなるよ。

残りもの食べてますます妻肥える 佐知子  
どうやらご自分のことを白状したらしい。そ  
れでよいのだ。身辺句をどしどしと生み出し  
ている内に、段々と上達している。食べると  
いう語と肥えるという語のどちらかを捨てな  
くては、七音字を無駄使ひすることになる  
よ。五句位は見せて欲しい。ご精進あれよ。

(残りものはかりでピチピチ妻肥える)  
どう入れても何も残らず腕を組み

見放されているんだといっていたが、精神  
的にもだいぶ参っていたようである。  
なにかに救いを求めたいという気が、  
川柳にすがりついたたのであろうか、とにか  
くそれからどんぐり川柳会へ毎月出席し  
て、熱心に句作に打ちこんだのである。  
遺族の方は、川柳のために寿命が二、三年  
延びたように思うといっておられたが、彼  
を川柳に誘った私も、そう信じている。  
医師に見放された彼が、その余生を安ら  
かに過ごし、川柳をしたことがどれだけ彼  
に力づけたことか、それをいつも口ぐせの  
ように云っていた。家族の人もよるこん  
でおられたことである。  
七月十七日に入院したが、見舞いに行っ  
た私に  
「もう利害関係がないから、気持ちよくつ

まさひろ  
腕組んでみても残高見つからず)  
初対面に残る遠花火 孝華

この調子を忘れ給うな。演出でない、自分の  
ほんとの気持ちや体験を句にするべく努めて  
欲しい。そんな句は生きています。感動を呼ぶ  
句でもある。

残おいた掛引き加減むつかしさ 藤持  
表現にも一つ足りないものがある。それは今  
回の五句共に言えるが、一句を生み落す為め  
の時間を三日もと長く使うことだ。一句  
完成に、三日も四日もかかることがあってよ  
い。そんな句は優れているよ。

題一急 九月二十日締切(十一月号発表)  
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七一一  
本田恵二郎

き合えるなあ」

と云い、これからは後世に遺るような川  
柳を作りたいと云っていた。

大吉さんは川柳によって大往生したと私  
は思っている。

あの世までついて行きたいような人  
生長

## 大吉抄

生長

坂道を押す妻があり六十路行く  
見透しの利かぬ眼鏡を妻が拭き  
静けさがわが足音をせき立てる  
腹いせに押したドアに押し出され  
蝶の舞う花園がありロータリー  
あきらめた命に薬効きははじめ  
欲が出て美味いばた餅食いとなり  
病院食箸と茶碗の味を知る  
病院のお粥がこんなに美味いとは

大萬川柳

「レンズ」

入選発表

選者 清水白柳  
投句総数 五百十八句  
入選 五十七句

神戸 どんたく

そのままに撮ったにレンズ叱らる

堺 天笑

コンタクトレンズはずして泣き直し

下関 木石

手相見のレンズ女難に一寸ふれ

富田 林美代

国体のレンズへ一人まだ来ない

堺 茂美

ハネムーンカメラの蓋を取り忘れ

倉吉 弘朗

測量のレンズで捉えたい眺め

今治 宵明

時計屋の小さい世界を見るレンズ

大阪 慶之助

レントゲン心の傷までよう撮らず

大阪 明陽

望遠レンズへアベックがひっきり

大阪 比呂路

その嘘を見ぬくレンズを拭く女

大阪 阿茶

ピンボケのレンズへみんなかま

鳥取 佳女

測定 of レンズへ小鳥じやまになり

倉敷 千翁

良心のレンズに死角などはなし

大阪 野迷路

天体の素顔へレンズ話しかけ

八尾 酔々

レンズ拭くようにほろ空を見る

大阪 美房

金魚鉢レンズの謎へ子の瞳

大阪 濁水

凸レンズとうとう妻よお前もか

倉敷 素身郎

凸レンズのような課長にくら

大阪 新之助

ズームレンズザイルの悲劇

八尾 一治

コンタクトレンズ飛び出す程に驚か

岐阜 鱗魚

乳のます鯨レンズは射的距離

倉敷 扇水

病名をレンズの通りには云えず

堺 一二三

定退後眼鏡拭く日の多い父

岡山 止水

度の強い眼鏡に変えて才女めき

岡山 止水

焦点の中で争う妻と母

和歌山 虎城

レンズ拭きなおい皺がなお見える

和歌山 虎城

レンズ持ち直して卒業写真真緑る

倉敷 恵二朗

貴賓席望遠レンズ意識する

短所しか見えぬレンズでねめまじ

大阪 柳志

どたん場でレンズに偽筆見破られ

倉敷 里風

レンズ目から外してダイヤ値

倉敷 里風

凹レンズはずせばパラナスを崩れ

米子 千代

凸レンズ今日の株価をたしかめる

岡山 久米雄

迷い消すようにレンズを拭きつ

岡山 久米雄

客絶えてわが掌へ当てる天眼鏡

岡山 久米雄

望遠鏡しばし宇宙の人となり

岡山 久米雄

よくもまあレンズ際どいと撮り

岡山 久米雄

佳句

堺 素郎

わが庵は魚眼レンズの隅の隅

富田 花梢

レンズからはみ出しそうな尻の笑い

倉敷 三林坊

手相より肚をさぐっているレンズ

呉 魁光

こんな顔はよそうレンズの思い

篠山 可住

レンズむければざらりと嘘の顔

堺 天笑

度のきついレンズの奥に棲む拒絶

地ノ句

倉敷 克枝

顕微鏡のぞけば何も食べられず  
天ノ句 大阪保夫

レンズ拭くばかりでハンコまだ押さず

昭和四十五年度

ベストテン (八月現在)

一 素郎 一八〇堺  
二 天笑 一七五堺  
三 水客 一七〇大阪  
四 千代 一五五米子  
五 吸江 一三五藤井等

六 可住 一三〇篠山  
七 三林坊 一三〇倉敷  
八 史好 一三〇松原  
九 好郎 一三〇高石  
十 素身郎 一二五倉敷  
十一 里風 一二〇倉敷  
十二 静馬 一一〇高槻  
十三 鬼遊 一〇〇高尾  
十四 柳志 一〇〇大阪  
十五 新之助 一〇〇大阪

十六 芳子 一〇〇島根  
十七 鱗魚 九五岐阜  
十八 花梢 九五富田林  
十九 利美 九〇尼崎  
二十 千翁 九〇倉敷  
二十一 惠二朗 九〇倉敷  
二十二 美朗 八五大阪  
二十三 史朗 八〇八代  
二十四 滋雀 八〇大阪  
二十五 康明 七五岡山  
二十六 曉明 七五大洲

以下略  
昭和四十五年度 第十回  
「美男」 五句以内  
締切 九月二十日  
第十一回  
「曲線」 五句以内  
締切 十月二十日  
投句先 大阪府高石市高師浜三丁目五一六  
郵便番号五九二 川村 好郎

### 詠

須坂市 高峰 柳児  
見透しの暗さへ黒幕顔出さず  
友情の重荷酔わせてからまれる  
風鈴も不快指数に歩を合せ  
大洲市 米沢 曉明

先生も一泡くった子らの知慧  
お役所の隅でこつこつ社交下手  
しゃべるだけ女マイナスと知らず  
和歌山市 秋月 宏方

人生相談読んでわが身を幸と知り  
八十の阪目標に生きる古稀  
名古屋 長谷川 鮮山

逆さまにすると判じ絵解けてくる  
洗面器の音から寮の明ける朝  
岐阜市 市川 鱒魚

忙しさを話す農夫がすわり込み  
恐ろしや孫の仕草にあるわたし

## 大阪文化祭 第22回 川柳大会

日時 45年11月23日 (祝) 11時開場・午後0時半開会  
会場 大阪市中央公会堂 (3階・小集会室)

### 講演

大阪教育大学教授 前田 勇氏  
「窓」  
「盃」  
「波紋」  
「公害」  
「神話」

### 席題

大会当日に二題を発表 (投句は正午に締切ります)  
各題ごとにハガキ一枚に二句ずつ記入 (住所・郵便番号・氏名・雅号を明記のこと)  
昭和四十五年十一月十日 (着限)

### 締切

宛先 (五三〇) 大阪府北区中之島  
大阪市教育委員会内 大阪文化祭川柳大会係  
でもお取次します)

### 賞

兼題・席題とも優秀句に、府知事・市長・府市教育委員長から「川柳賞」を贈呈  
また佳作には選者賞を贈ります

### 句集

入選句集をご希望の方は一〇〇円を別送して下さい。

主催 大阪府・大阪市・大阪府教育委員会  
大阪市教育委員会

# ☆柳 界 展 望☆



玉造・南大阪合同川柳会吟行  
(伊太祈曾神社・柳宏子撮影)  
(橋高薫風担当)

▼中島生々庵主幹揮毫の川柳手ぬぐい。「一声出してみたいとかまきり身構える」が東奥日報社主催の県川柳大会参加者に記念品として渡され好評であった。

▼麻生霞乃先生は河内の梨里さん宅に一月以上おられた。編集部の一三夫、菓子さんに暑中のご激励をい、ただく「農業を知らぬ生駒の蟬さわぐ」霞乃。

▼大阪市民文化祭川柳大会は十一月二十三日に開催。(詳細本誌)

▼ふあうすと七月号は租元

紋太追悼号として発行。  
▼第二十二回西日本川柳大会は九月十三日(日)午前九時から岡山県久米郡久米南町下弓削久米南中学校で開催。兼題一輪・濡れる・大声・末席・サイン・胸一各題二句以内。選者は清水白柳、増井不也、西沢青二、山本磔、大森風来子、横部牛歩。席題三題。投句は縦二十糎、横四糎の句箋を使用し裏に雅号を明記、投句料二百円封入の上、岡山県久米郡久米南町弓削川柳社宛。出席者は当日日出句

締切十一時。  
▼第十九回東北川柳大会は十月四日(日)午前十時から、プラザザ・イン仙台ビル八階ホールで開催。兼題一「鮮烈・白石朝太郎。S O S・石原青竜刀。オモチヤ・高橋放浪児。たぐる。後藤柳本。ときめき・渡辺銀雨。本番・伊藤蘇子。転がる。菅原一字。味・伊達南谷子。大胆不敵・後藤閑人。席題三題。投句は二百円封入の上、仙台市東八番丁一七〇、後藤閑人方東北川柳大会事務局宛。

▼柳宴誌齡二百号記念川柳大会は、野口北羊川柳作品揮毫展を併催して、十月十八日(日)午前十時から岐阜市金町六丁目日本生命保険ビルで開催。兼題一平和・個展・板場・躍進・定休日・柿・貫録。席題三題。各題二句。投句は二百円封入、原稿用紙半載の用紙に各題別に記入。十月十日迄に岐阜市本郷町六丁目井川紋弥方柳宴二百号記念大会係宛。又送句制作品も募集されており、近詠三句を連記、これは八月三十一日迄に参加料一口二百円(何口でも可)を封入、前記へ送付のこと。

▼丹波太路句集「傘寿」刊行記念句会は九月二十日(日)正午から大阪府教育会館四階大講堂(近鉄上六北サスターミナル橋本側)で開催。兼題一童心・橋本言也選。会釈・清水白柳選。史跡・片岡つとむ選。顔の艶・平賀紅寿選。ゆとり艶方楽選。太陽・近江砂入選。菊・丹波太路謝選。席題二題。各題二句。会費千円。太路句集「傘寿」記念品、折鶴十月号及び発表誌呈、投句は百五十円封入の上九月十日までに大阪市住吉区墨江五六丁一、

▼番傘折鶴川柳会宛。懇親宴は同所で午後六時から会費千円で。懇親宴に出席の向は九月十日迄に前記宛通知のこと。

▼時の川柳社の誌上川柳大会は第一回予選。兼題一無口・一枚・辞退・同情。各題三句。締切九月五日、会費百円。第二回予選、兼題一拒否・好奇心(清水白柳選)、暮色・話術、会費百円締切十月五日。予選合点上位二十五名により第三回争覇選、雑詠(選者五氏)が行なわれる趣向である。

▼昭和四十四年度垂天賞は

青木浮岳氏(福岡)が受賞された。受賞句は「一枚の白紙を鳩に折り鷹に折り」▼むらくも六月号は矢道句会特集号として発行。

▼第十五回西区民川柳大会は九月二十七日正午から名古屋市西区役所四階ホールで開催。柳話・斎藤旭映。兼題一鼻声・赤ちゃん・抗議・だんまり・ハイミス。

## 句会往来

▼玉造川柳会―九月十日午後六時。題一姿勢・光。宿題一「公害」大阪信用金庫。

▼南海川柳会―九月十七日午後六時。題一出張・ストレス・肩―親和クラブ。

▼南大阪川柳会―九月二十日午後六時。題一親善・手引き・チビツ、以和貴荘。崎町二丁目、

席題三題。各題三句。投句は百円封入の上九月十五日迄に、名古屋市西区西菊井町三の六加藤一星宛。

▼岡山県芸術祭第五回岡山県文学選奨、川柳部門の応募は、岡山県内在住者に限り年齢は問わない。未発表の作品十句(但し四十四年十月一日から四十五年九月三十一日まで)に発表のもの(可)。住所・氏名・年齢

・職業を明記のこゑ。締切りは九月三十日、発表十二月一日。審査員―大森風来子、丸山弓削平。投句先―岡山市内山下八一の一、岡山県教育庁文化課宛。

▲大森風来子氏(岡山市)は六月二十五日(木)岡山市民会館大ホールでの救難事業功績者表彰式で、高松宮同妃殿下臨席の下表彰を受け、宮様から親しく労をねぎらわれて感激された。

▲岸本吟一氏(茅ヶ崎市)は長宗白鬼氏に代り川柳東京の近詠選を担当されることになった。

▲備前川柳社うどん祭りは七月十八日浜田久米雄居で盆踊りの音頭でみんな外へ出て踊り回った由。

▲尼緑之助氏(出雲市)宅に電話開通、㊟局四六九八番。

▲浜野奇童氏(岡山県)は丸三年の辺地勤務を無事に終え、四月から自宅通勤されているが、老父、夫人、令息が引き続いて入院され

るなど作句が意にまかせずおられたが、夏期休暇に入り一息つかれたと。

▼本田恵二郎氏(倉敷市同人)は八月二日、桃花苑での東洋樹賞(大森風来子氏)路郎賞(本田恵二郎氏)、三太郎賞(丸山弓削平氏)受賞祝賀会で多数の出席者から祝福された。受賞者―足跡を残そう砂のある限り)の木彫の桶六百個を製作、ライオンズクラブ会員等配布された。今日だけ

は恵二郎節を出しそびれ、工藤甲吉氏(青森市同人)から「弘前は今夜(八月一日)からねぶたまつりで、小生審査員の一人。十二時頃までかかります。暑くて眠くて閉口します。」

▲小浜牧先生の神戸市同人から「萩先生句集出版おめでどう存じます。記念句会へは是非出席します。大阪へも二年位出かけておらね、鮎美さん、すゝみさん、紋太先生、梅志さん等の身近だった方が亡くなり淋し

## 大嶋涛明氏逝去

(川柳噴煙吟社主宰)

八月六日十四時五分逝去。享年八十歳。六十年の柳歴は輝しい。八日午後一時坪井立町泰陽寺で告別式。

謹悼

い限りです。皆様のことあとで雑誌を開いてはじめて知って驚くような仕末で不本意乍ら不義理の連続で自責しております。」

▼河内天笑氏(堺市同人)は七月十五日首陽で入院手術、二十三日に退院、病みもとれたが、車に乗ること酒を飲むこと、重い物を持つことを禁じられ、この夏は排気ガスを吸わずにすむようだと句信を寄せられた。「鯉の背にふんわり座るちぎれ雲」

▼北国日出雄著「駝鳥」が工都叢書として八月一日工都叢書刊行会から発行された。著者は作者のことばの中で「いまつくづく句材の視野の狭さ、叙法の不器用さ、言葉の固さを痛感した日本人の精神構造に適った十七音のリズムの大切さ、リアリティを失わないロマンテイシズムの往くべき道を憶い……。」と述べ懐しているが、著者自身当を得た言葉だと思ふ。頒価百円。回覧期

ユイモアがわかりフランス語が楽し

▼阿万万的氏(大阪同人)は川柳ずいひつ、京ところ

どころを、発刊。挿絵から印刷まで自分の手になるもの。

▼奈良県川柳大会(第三十三回)は八月十三日午前九時から下市町十三橋山崎会館―題は宮口笹生選の「無」のほかに「現在・覗く・私」支える。腕―投句九月十日締切、吉野郡下市町本町―河合渡口宛。

▼文化祭川柳大会と川柳文化賞贈呈式が十一月三日午前十一時。中央区新富町印刷会館。

題―迷う・角・双児・這う鼻・聖女・計る・毒虫。投句料百五十円、宛先東京都練馬区練馬四―二三―七、三浦太郎丸。

▼堀江正朗氏(島根同人)は異傷痍軍人大会で表彰、芳子さんも妻の会から同伴出席。おめでとう。

▼室谷鉄舟氏(大阪同人)は微舟と改号。

▼島野大吉氏(大阪同人)は八月二日午前二時四十分森之宮成人病センターで逝去。六十三歳。謹悼。

▼阿部柳太氏(大阪同人)宅の近くで七月月中旬火事があり―消火器を忘れパケツをさげて出る―柳太。

▼若柳潮花氏(大阪同人)

は八月十八日三越劇場へ舞踊で出演、好評だった。

▼旅信―清水一保氏(鳥取同人)は九州から。三井酔夢さん(香川同人)は山口から。小野克枝さん(倉敷同人)は岩国から。八木摩太郎氏(大阪同人)は日光から。福田丁路氏(大阪同人)は宍道湖から。山田季贊氏(大阪同人)は大台ヶ原から。大江秋月氏(兵庫同人)は赤穂からいたたく

▼清水白柳氏は八月初旬、心筋硬塞で阪和病院へ入院されたが下旬に退院。

健康!  
**アリナミンA**



☆効能―疲労・神経痛

# 西尾 栞句集「水鶏笛」刊行記念句会

8月7日 会場 以和貴荘

栞句集「水鶏笛」刊行記念句会―題名も著者にちなんだものばかり。祝詞生々庵主幹、柳話多久志氏も句集をたたえ、各選者も栞氏に祝詞をのべ、各地からの祝電など、句集刊行一色の句会である。薫風氏はか明和病院時代、栞氏に手ほどきされた人たちも駆けつけ、牧人、鶴汀氏ほか珍しい顔も揃う。牧人氏から栞氏に記念品の贈呈シーンも美しい。

やや小康という小松園氏も出席され「水鶏笛」の好評をよるこんで外られた。閉会后、有志だけで句集刊行祝賀会を松崎町「大萬」で催した。ビールの栓がつきつき抜かれ、短い時間ではあったが賑やかに祝杯が右に左にいそがしかった。

今月の月間賞は橋高薫風氏にきまる。

(河井庸佑整理)

出席―栞・与呂志・薫風・鶴汀・新之助・古方・圭井堂・静馬・没食子・金三・一舟・花梢・一三夫・柳宏子・滋雀・季贊・綾女・好一・水客・形水・静歩・儀一・弦月・文秋・いさむ・トメ子・万的・肖二・杜的・鶴

声・誓二・凡九郎・庸佑・葛城・太茂津・葵水・千寿吉・多久志・白柳・つき子・一扇・茂美・凡吉・維久子・小松園・一二三・修史・竹荘・生々庵・酔々・宣介・鬼遊・笛生・一治・河産・牧人・史好・夢虹・菁風・葉子

## 席題「眼鏡」

野呂 鶴汀選

見まへ字へめがね上げたり下したり 好一  
サングラスいよいよ尾行にもかかり 弦月  
度の強い眼鏡はずせば妻美人 鬼遊  
カッコよく嘘をついてはサングラス 一扇  
お見合の結果は眼鏡気に入らず 笛生  
度のきつい眼鏡は直ぐに覚えられ 葛城  
どうしても出来ぬ相談眼鏡拭く 多久志  
サングラスぼつぼつ掛けて見たい 醉々  
今置いた眼鏡を探す 独り言 滋雀  
眼鏡越しににらんで刑事話題替え 圭井堂  
プリントへ眼鏡忘れた日の不覚 儀一  
色眼鏡かける女の転落史 修史  
片方の義眼は云わずサングラス 生々庵  
映写中女こっそりメガネかけ 葵水

眼鏡忘れて来て美しい遠花火  
今日だけは眼鏡外して行く見合い  
鼻のこといわず眼鏡がずり落ちる  
マイナスと知らぬ具合のダテ眼鏡  
嘆願へ眼鏡の底はあたたく  
三代に続く眼鏡の血がたかり  
流行をおって眼鏡の血がかえる  
夏ばてか老眼鏡もズリ落ちて  
度の強い眼鏡がお人好しに見え  
老眼が似合う父です愚痴もふえ  
泣く時の眼鏡邪慳に扱われ  
本心を眼鏡はずして打明ける  
盲目のまなこに悲しサングラス  
寄付帳へ眼鏡かけたりはずしたり  
世をすねてネオンの街の色眼鏡

## 席題「髭」

市場没食子選

シンボルの髭を落して御退院 圭井堂  
パーバーへ女傑もひげをそりに行き つき子  
海老のひげ画家のタッチで生きて 白柳  
髭落し若う見ると賞められる 維久子  
ビールの泡つれてチョビ髭よいき 竹荘  
妹に叱られてる痛さがなつかしい 白柳  
再会へひげの痛さがなつかしい 柳宏子  
髭のおっさん仲々さばけてい 葉  
付け髭でしたんかと鼻の下などで 古方  
没落の髭その儘にスラム街 鶴声  
ロマンスも遠く老鏡なしよう 花梢  
優勝杯縁起のヒゲをなでよう 一三夫  
ジントウを気にして髭を剃らな 形水  
なまいきになって息子の無精髭 笛生  
恐妻会会長殿も髭を置き 一舟

髭のある頃の写真を大事がり  
 ヒッピーの無精ひげ社会にすねて  
 反抗の不精ひげがませすぎる  
 髭剃りやれローションだクリームだ  
 末席で立派な髭がくだをまき  
 日曜の窓から風が髭をなで  
 髭さんと言う愛称で親しまれ  
 流行といえど髭顔いやらしい  
 髭ボウボウスダ見事な汚れ役  
 パパの顔髭黒々とクレヨン画  
 ハタタリも髭は薄くて役立たず  
 婦人科の先生という髭を付け  
 看板の髭が売れてる夜泣きそば  
 職かえて営業用の髭をおき  
 三選へ自信ありげな髭をおき  
 チョビ髭の笑顔は孫に取巻かれ  
 口吻けに髭は相手の鼻を突き  
 無精髭などで合宿から子が戻り  
 エリートを自負して朝の髭を剃る  
 髭生やして中風で寝てるなり  
 電気カミソリも止つてしまう程の  
 ホス或る日思うことあり髭をそり  
 髭のある横顔詩人眼をとじる  
 髭に露ためて蕎麦食う発車前  
 威厳のつもり髭が笑っている愛嬌  
 髭のない税吏へ髭がかしこまり  
 髭の手前寄付金あまりケチられず  
 ぶつぶつと髭が動いてたひとり言  
 間伸びした顔チョコビ髭がしめくる  
 特徴はあのチョコビ髭とあの眼鏡  
 没食子

席題「菓子」

岡橋 宣介選

菓子つくる男の汗を見ていたり  
 駄菓子屋の店内暗し何か買う  
 綿菓子の子供の夢をすくい上げ  
 盆踊りキヤラメルくれる輪にはいり  
 創業百年と言うお菓子屋も京のもの  
 お菓子の貴録宮内庁御用達  
 茶を立てて鶴屋八幡娘のおどり  
 売れ残る菓子がどうのと苦勞性  
 いまナイフ入るケーキへ手をそえる  
 菊の香を入れて名菓の名にはじす  
 日本菓子みんな英語にかわりだし  
 末席は茶菓子が減っている雑談  
 酒やめて子供のお菓子がほしくなり  
 菓子屋の子よそのお菓子を買いた  
 数読んで分ける菓子なり子沢山  
 宿で出た茶菓子土産に買うと決め  
 お茶席で菓子執る手付きに年期見る  
 おなかこわい菓子屋の前で子を叱り  
 フランス語で呼ば手製のママの菓子  
 菓子皿のそれに家風をふと感じ  
 菓子箱の中味現ナマかも知れず  
 お茶席で水無月の由来聞かされる  
 綿菓子の軽さ愛しい祭笛  
 兼題「鶏」

水客 白柳 鬼遊 一三夫 万三夫 一三夫 茂美 圭井堂 凡九郎 好一 小松園 没食子 葛城 白柳 生々庵 弦月 杜的 宣介 大坂形 水選 某人 章雅 どんたく 芳子 正朗 野迷路 笛生

残暑お見舞い

大鉄川柳会

正本 水客 宮口 笛生  
 阿万 万的 大江 秋月  
 松川 杜的 植村 客遊子  
 松下 たつみ 丸川 初甫  
 永尾 英断 吉原 紅月  
 山田 季賛 保西 岳詩  
 都倉 求芽 辻 白溪子



あざけりの笛の中なる僕ひとり 鬼遊  
 なつメロの二番目からは口笛で 虎城  
 信念の弱さへ悪魔笛を吹く 文秋  
 横笛を吹く少年の指白し 一三夫  
 薪能笛にも鬼気が迫まるよう 竹荘  
 古城今すすきと風と笛の音と 静歩  
 子の笛に合わせて唄うキャンプの火 与呂志  
 草笛もフォークソングで村平和 葵水  
 口笛は男の中の一人っ娘 鷗汀  
 幼稚園列の乱れを笛で矯め 栞  
 アルバイトの山の子草笛ふいてくれ 万的  
 鍵っ子の口笛夏の陽がまとも 杜的  
 笛吹いて按擦が通れば殺陣のシーン 一三夫  
 曲り角笛が途切れる鼓笛隊 古方  
 裏口に詐り多き笛となる 小松園  
 笛吹けど何ちらでもよい人ばかり 小松園

郷愁の汽笛が暑さかきたてる 笛生  
 口笛を吹きながら男岐路に立つ 河産  
 警笛が自分に吹かれてると知らず 与呂志  
 も一人の僕がピエロの笛を吹く 柳宏子  
 孤独感我が口笛にはげまされ 一治  
 笛の音に今日の幸せかみしめる 一舟  
 口笛が夜ふけの街にふさわしい 鷗汀  
 人間の我欲を停める笛がない 一二三  
 試合が近い体育館の笛となる 万的  
 口笛を吹くと野良犬遠ざかる 形水  
 群盲の一人になって笛を聞く 水客  
 兼題「栞」 西尾 栞選  
 それとなく栞に書いて本を貸し 正朗  
 緋けば紙魚は栞の型で居る どんたく  
 今日と明日栞ではさみ灯をおとす 孤呂二  
 みな同じ修学旅行京を発つ 某人

詠

待避線見え隠れして月見草 今治市 月原宵明  
 局番を廻して恋は思案する  
 人事課は噂の二人切り離し 今治市 長野文庫

近

気になって目ざましよりも先に起き  
 自動車で来たから出来ぬおつき合  
 保存する気で切り抜いてそのまんま  
 小松市 山上千太郎  
 碁のやりとり父を守りするコツを知り  
 下積に腹の立つ記事ばかり見え

台風10号お見舞い

災害地の皆様に謹んでお見舞い申しあげます。  
 川柳塔社

日曜も図書館栞の七曜表 章雅  
 万博の栞が夢の輪をひろげ 一舟  
 古本の栞は確か女らし 小松園  
 栞までしたのに彼女読みもせず 静馬  
 パラ播いた入社栞が役に立ち 万二  
 ガイドブックに名もなき山の花は 警的  
 古本の中に夢となりし画の栞 形水  
 バイブルに栞となりし虫哀れ 鬼遊  
 書き抜いたメモを栞に研究書 白柳  
 青春に悔なし愛の栞あり 酔々  
 せめてもの栞で残す草紅葉 一治  
 無欲無策栞を入れて昼寝する 静歩  
 宮内庁も入れて名葉を説く栞 一二三  
 開門を待つ間栞を読みかえし 好一  
 今置いていった名刺を栞にす 形水  
 周遊券栞となって旅に閉じ 滋雀  
 亡き祖母の和閉じの本にある栞 葛城  
 その日その日の栞に妻の声がある 水客  
 六法全書栞が五六枚も要り 一三夫  
 揚げ底の土産も栞入ってち 凡九郎  
 旅好きの旅の栞とこけしたち 竹莊  
 栞のときまで妻も読んで新刊書 文秋  
 立読みのまさか栞も入れとけず 薫風  
 栞にキリスト少女十年来を病み 銘菓の栞実篤さんとすぐわかり

# 老地物壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

## 玉造川柳会

西出一栄報

床の間の優勝カップ話しかけ綾女  
合格をめぐる明るい膳に付き儀一  
カギ子の百点走って帰りたい恒明  
馴れても地下街やっぱりややく好一  
地下街も近道がある人の波形水  
朝の地下街走って抜いていきはった古方  
夢中より醒れてみじめな影を連れ千代  
持ち逃げはされるし手形は廻って来静馬  
同僚であった課長に指図され葵水  
みじめさを嘆みしめ見舞もいベッド滋雀  
どん底のみじめさ知らぬ子が恐い眞山  
長患い子等にみじめな思いさせ鶴三  
みじめなりゲテもの喰らう手にかかり柳宏子  
小石にまで馬鹿にされているみじめ柳宏子  
往復を歩いて愉しむ夜に二人六童子  
復券を仕舞い忘れる程の酔い虎城  
往復も楽しあ娘の通る頃肖二  
何時錦着て帰るやらこの峠一舟  
手術室往復をする音ばかり白柳  
往復ハガキの不参へみじめ〇を書き一二三

往復の切符を女から貰う作二郎  
ゆきかえり苦にもならず朝詣り満  
往復につかれた下駄が裏返えり富踊子  
一ト言も返えさぬ妻の顔の色雀子  
負けの犬駄足一ト言「おぼえとれ」章雅  
一ト言を言いてそえてくれる妻でよし弘生  
その一ト言が愛のキズナを結びつけ太茂津  
一ト言をひかえる妻に不憫まし正史  
一ト言も云わぬうちから皆判り誓二  
ライバルのその一ト言がきびしい夜文秋  
切り札にする一ト言をしましとく秋

## 南大阪川柳会

金井文秋報

背を向けて次の偽り待つゆとり美代  
偽りと知っても課長とぼけてり酔々  
砂遊びうちの子ボスと云うポーズ恒明  
つきまとう魔口笛となっていく花梢  
一夜明け胸に偽りとぐろまく柳宏子  
偽りの色食欲をそそる色文秋  
楽天家妻の苦労は気が付かず綾女  
偽りの恋でもししたい金が出来三  
砂りむりここからはいる過疎地帯金三  
偽りに馴れ公約を遠く聞く滋雀  
なるようになるさこの世で出来た事好一  
自分まで偽っていた恋おわる新之助  
偽りの弁明うつるな声となり肖二  
高いびき妻がやせよ子が泣くがあいき  
ホテルから魔のさしたのが二人出る白三  
寝不足の母を気づかうベッドの眼一二三  
脱ぎ捨てたスボン不審な砂が落ち形水  
熱砂上寝そべてモデル銭にするみつる  
横這いの物価指数に胸を撫で誓二

お人好し偽りおおせたつもりなり凡九郎  
横這いの物価に給料までならい双楽  
七十年横這いも有った我が人生鶴声  
横這いのパパのサラリ一責めるまい喜風  
楽天家そうかそうかと聞くばかり一  
四苦八苦の偽り見きりとも言えず千梢  
寝不足を案じる母も灯を消さず千代  
楽天家の笑いの奥にある驕り葵水  
女みな魔物と知りつつ引っかかり静馬  
性善と人疑わぬ楽天家章雅  
魔がさしてから踏み切って夜の蝶朋子  
お茶漬をかきこみ魔女として武装朋子  
備前川柳社 目賀芳月報

腹なんかつとも空かん連れと行き万女  
うかつにも天狗が罨に引掛り三与子  
金持ちの罨に貧乏人が落ち浄美  
午前二時えくぼが罨に変わりかけ正州  
親切な男の罨に気がつかず一声  
二枚目の口を信じて罨に落ち秋水  
そこに罨あるらし妥協せずにおき秋月  
馴れてもなつたか罨をよけて行き清春  
子の罨へ大声あげてこけてやり柳子  
罨のある宿とも知らず連れ込まれ伊久野  
罨の待つ自動扉へ女消え胡風  
公害の罨とも知らず畑を売り幸仙  
五本目の煙草で罨だなと気付き芳月  
罨だとは知りつつ悪女も罨で消え明郎  
へそくりも退帳金も罨で消え宗良  
栄光の裏にも捨身の顔があり地校  
出勤のぎりぎりまでも子ほんのう愚案坊  
罨だとは知らず雀が寄って来る草二

捨て石をあなごりすきて巽におち  
お地蔵の泥がかわかぬままに春  
久米雄

辻圭水報

たくを

店たたみこじんまりといる裏通り  
裏通りの小女を淋しがるせる灯  
プラカード煙草のみみ裏通り  
裏通り舗装本通り工事中  
裏通りまだうっぶんの腰をすえ  
裏通り老人会は気がそろい  
ネオンの灯一字消えてた裏通り  
裏通り義理人情が生きて  
和歌山短詩型文学クラブ  
中筋三幸報

勇次

次

なすびなど植えてバケツも終りなり  
ポリバケツ音のせぬのが尚くやし  
掃除するだけのバケツも色で買う  
水を撒くバケツ童心じみる庭  
突堤の駐車漁連が金をとり  
非常用バケツは納屋にしまつとき  
拝観料とってちびけた菓草履  
印鑑の手製の袋亡母の垢  
世辞言うた因果残せぬまずい味  
手製のドーナツ色々な型になり  
過激派の応戦手製のものばかり  
有料の額み仏の意にあらざ  
この手製誰かの肌に触れるもの  
女の城手製のバケツに溢れ  
三つの子大人のバケツ持ちたがり  
このバケツひびきも我と共にあり  
有料ときいて見るのを止めにする  
有料になつて公園整備され  
有料の道路西日の高野山

蘇風

風

有料の釣場魚が銭に見え  
富柳会句会(富田林市) 阿部柳太郎

伏せて置く愛は女のたからも  
スモン置まだ正体の謎とけず  
或不覚小骨が歯ぐきに突き刺さり  
小骨ある言葉も憎い恋仇  
気のかめ小骨がスクラム組んでも  
小骨丹念に抜いて板前宵のヒマ  
半玉が鮎の小骨をすいただけ  
尻馬に乗って損する馬券買え  
尻馬は二十才足音盗むりたがり  
ちやほよとされて尻馬乗りたがり  
尻馬と分り始末書だけで済み  
開幕のベル足音をかきあつめ  
足音がわたしに向つて来る思い  
街灯が消えているから足音が怖い

白柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳



裸にもなれず浮世の苦にあえぐ暢一  
情報に溜息流す株屋さん幸太郎  
C・M製品よりも裸撮り創三

裸になれず虚飾の服に包まれて  
情報が入りソロバン持ちなおし平野  
政治家も裸にならばみなおなじ健坊  
情報という怪物に踊らさね武田

ベンチ知る悲喜交々の人生図神田  
公園のベンチは二人掛けでよい一扇  
情報が末広がりで倒産し常夢  
人生に疲れた人も来るベンチ木石

監督の自信ベンチを動かない形水  
湯舟から後姿のゲイボーイ入仙  
知っていたふりで情報聞いておく白柳

明朗句会

川口弘生報

お祭を見るおえら方別な顔繁子  
御祝儀へミコシを高こう高こうあげ雅万  
隣村の祭りで同じヤシに会い弘生

お社の裏にぎやかな村祭為二  
コッポリの孫と祭の花火買マ三十四  
交通難尻目に京のダシにハマ志津

お祭の神姫嫁入りが早められ久津  
張り上げて俺が国さの唄祭り多幸  
夏祭去年の娘のママ姿隼人

お祭りはやっぱり国へ帰るとし進  
貧すれば祭太鼓が身に泌みる茶々坊  
お祭りへバスも大增発と書き春巢

鯉のぼり子供の成長鯉の上に秀村  
人生の海山越えて古稀迎え富士  
釣天狗飯より先に魚拓とりシゲ

天神様も夜遊びなさる夏祭濁水  
まな板は赤字の家計を知っている満津子  
目腐れ金で八百長をするが悲し春巢  
たけはら川柳会 小島蘭幸報

姉ちゃんのお化粧見ていて楽し洋子  
そっけない返事父の眼がキラリ康宏  
一人ではないギタートと二人日出夫  
チョンチョンで済み転業は考えず扇水

一杯のビールに酔うた真似もして不  
力強い一言やっぱり男です草人  
酸素吸う音片肺を意識するのり子  
怒ってるらしい門灯消えており静雨

だんだんにおふくろの味とほめらる三枝子  
言葉では言えぬ痛みをぐっと飲む鬼焼  
お守りの不思議信じている無事故泉  
豊かなる生活へ照準合わされる郷愁

夜なべする妻にあくびをうつされて清太郎  
職のある強味規律をとり戻す大陸  
逃避するのにはパチンコとは淋し文晴

求人欄みんな僕より多い額一路  
落ちていてじわじわ感ず周囲の目峰一  
安着を知らしわが家がいつちよい英詩泉

プロポーズそれから男なれなれし菁居  
保護色を過信アマガエルの不覚そのみ  
お迎えに来るマイカーを羨まれ

倅せか過去の苦勞を懐しむ雅鳳  
スナップは全部笑顔で写つたり延美  
あなたより一步離れて見えます静己

人形の生命そだてておさない児路秋  
機関士の顔郊外へ出たゆるみ美佐  
生甲斐は子の夢だけの日々でよし

主婦多忙雨には雨の用があり貞子  
献血へ妻が気遣うお献立静志  
花鉄エゴむきだしの音で断つ不  
タンポポの縮毛の哀れなる丸も蘭子  
空気の重たさ声を出せぬにも天石庵  
ガツリとスクラム組をユニホーム紫苑  
夏はもうみやこわすれの紫に松房  
この若さ孫には負けまい腕角力緑  
ごめんなさいあなたをサロンプス  
喫茶店で白昼した和解静水  
▼新潟回天子氏(唐津市同人)は八月初旬令  
息と万博見物を兼ねて本社を訪問された。

旅行・宴会・リクリエーションの  
ことならどんなことでもご相談くだ  
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

# イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機株式会社食堂内  
TEL 06 (991) 1181 内線 588

# 川柳忌句会

日時 九月五日(土) 午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275番

柳話 清水白柳  
「過川去」 西多柳宏子選  
「遺柳品」 阿万柳志選  
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句  
若本多志選  
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

10月の兼題 「アイデア」 「祝杯」  
「運勢」 「名言」

同人総会は10月4日午後3時  
二賞発表句会は同日午後5時半

## 川柳塔社常任理事会

八月四日、本社階上で常任理事会開催。栗氏から、十一月二十三日(祝)に開かれる大阪市文化祭川柳大会の取りきめなどの報告があった。ことしは川柳塔社が当番なので、それらの打ち合わせと、九月句会、十月句会、グンと飛んで来年の路郎忌にまで構想がのびる。好郎氏や小松園氏が病欠(現在はほとんど健康をとり戻されている。)

出席―生々庵・栗・古方・白柳・多久志・形水・一三夫諸氏。  
七月四日の理事会では、路郎忌句会解散後、遠来の人々を囲み、有志で懇親会。八月句会には句集刊行記念句会のおと、有志で祝賀会。九月句会には物故者の慰霊祭を行なうなどがきまる。  
出席―白柳・多久志・形水・好郎・栗諸氏。

### 十一月号発表表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳構(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

募 「サンプル」 隠岐 不醉 選

「世渡り」 野田 素身郎 選

「前置き」 川竹 松風 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

### 十二月号発表表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳構(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

募 「人妻」 小浜 牧人 選

「口笛」 山田 季賛 選

「ピエロ」 渡辺 曉童 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千 百 円 送料共

一年分 二千百六十円(送料負担)

昭和四十五年八月二十五日印刷

昭和四十五年九月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬 太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

電話大阪 二七一―三九八五番  
電話口座 大阪 三三三六八番

## ・ペンペン草・

★うっかり空気も吸えなくなつて戦時中の空襲警報よろしく避難命令が出るという騒ぎだ。只今、公害戦争中である。

★歩行者天国とか、オアシス道路とかいって自動車を開閉した。ニューヨークの五番街のことは知らないが、東京の場合、阿波おどりまでくりだすお祭りさわざきに、歩く阿呆を見に行く阿呆、というほどの人出だ。やっぱり何かが狂っているようである。

★麻生霞乃先生から久しぶりに玉句をいただいた。女流作家としては国宝級であるこというまでもない。

★霞乃先生は、夏のきらいな方で、いつかもここで書いたように「暑い」「暑い」を日に何十回も連発される。ご送稿いただいたのは八月四日汗っかきのボク、この日も編集室でハダ

カだった。先生の「暑い」「暑い」をフト思ひだしたことである。

★十一月二十三日は大阪市民文化祭川柳大会である。本年はうちが当番だが、路郎、水府両先生のご存命中は、宿命のライバルとあって、よい意味での「殺気」が毎年たどったこと、このごろの「ん」とおだやかさすることよ。ただしこれでお客が集れば文句はないが、とにかく今年川柳塔社の当番である。

★川柳中興の祖といわれる阪井久良俊先生の句碑建立、一口五百円の募金展開中である——別掲参照——ぜひあなたも一口、ご協力を。

★久良俊翁にたった一度だけご選句ねがつたことがある。あれからもう四十年になる。

にいたっていた原稿を集めた。

★今月は川傍柳初篋研究と麻生路郎作品がお休みをいただくほか、多くの未発表原稿が山積しているが、今しばらくお待ちください。

★次号は本年度の総計算、二賞の発表である。いわゆる通俗小説というのがマンガに鞍替えし、テレビが週刊誌のかわりをして今日、茶川賞にあたいするよな名句がほしい。

★仕事の都合で、ちよっとヒマができたので、積読の整理をした。

★松江の恋人にも九月と十月には逢いに行けそうである。木次の芳子さんが、身寄りのすくない「恋人」の家をたずねてくださった。ご病身だということ、ありがたいのである。

★松江へ行ったら短冊を書かされますよと葉子さんは云う。これだけは苦手である。(不二) 一三二六

料理も電話も

# 551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

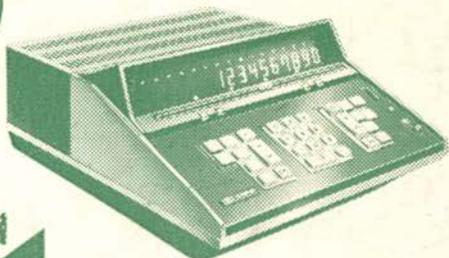
# 豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

タッチでえらべば  
やっぱりサコム



サンヨー電子式電算機

**サコム**  
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円  
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き  
16ケタ2メモリー高級品

**SANYO** 三洋電機株式会社

頭痛・歯痛  
生理痛に

**セデス錠**

痛いときに普通2錠、痛みの激しいときには3錠を おのみ下さい。  
ご使用のとき、必ず説明書をおよみ下さい。なおアミノピリンなどの薬物に過敏体質の方はのまないで下さい。

シオノギ製薬



■頭痛  
■歯痛  
■生理痛

鎮痛剤は正しくお使い下さい